
~ 三人の転生者・メイドと漆黒 ~

秋代

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

～三人の転生者・メイドと漆黒～

【Nコード】

N8378U

【作者名】

秋代

【あらすじ】

これは、とある無敵クラスの真祖の吸血鬼と、最上級最強クラスのガイノイドが、ある世界からイレギュラーを排除する物語。

最初はキャラ紹介（前書き）

茶々丸「マスター……私達の秘密が晒されます」

カスミ「別にどうでもよくないか？」

茶々丸「あ、マスターの恥ずかしい過去も」

カスミ「何！？ それはダメだ！！ 今すぐ消せ、茶々丸！！」

茶々丸「嘘です」

カスミ「そ、そうか……よかった」

オチなし

最初はキャラ紹介

主人公

名前 絡繰 茶々丸

ヨミ カラクリ チャチャマル

性別 女

容姿 ネギま！と同じで、機械らしい部分は耳のところだけ。

性格 マスターLOVE

IS 栄光の星グローリー・スター

備考 三人の転生者々の茶々丸で、いろいろとネタが積まれた茶々丸。

体内にGNドライブを搭載しており、GN粒子を展開する時は、露出してる肌から溢れ出る。

見た目的に、魔力開放した感じに見える。

TRANS - AMは可能で、オプションパーツとして、クアンタのような肩のGNドライブを所持してツインドライブ可能。

ツインドライブでTRANS - AMを使うと、あるシステムが使用可能になる。

さらに、ノーマル状態でも強い。

ミサイルを召喚したり、機械仕掛けの剣や斧、槍など出して戦う。

ISは、スーパーロボット大戦Zで登場した、女主人公の機体バルゴラをIS化したモノ。

スフィアはもちろんある。

ファーストシフト前がバルゴラ（ノーマル）で、ファーストシフトするとバルゴラ・グローリーとなる。

主人公

ヒロイン

名前 カスミ・ヴェネーラ

ヨミ カスミ・ヴェネーラ

性別 女

容姿 リリカルなのはのフェイト似。
髪はポニーテールにしてる。

性格 篠ノ之 束に似た性格。
つまりは、他人と身内の線引きがハンパない。

IS 漆黒の風シュロウガ

備考 〓三人の転生者〓の主人公兼ヒロイン。
最近、神様になった。

戦闘すれば負ける事はない。

真祖の吸血鬼。

ISは、スーパーロボット大戦Zで登場したアサキムというキャラが、使っていたシュロウガをIS化したモノ。

ファーストシフト前はサイバスターで、ファーストシフトするとシュロウガになる。

ヒロイン

マスターと同室だなんて、私の理性が耐えられない！（前書き）

茶々丸「マスター……もうダメ……」

カスミ「待て！ ガイノイドだろ？ 鋼鉄の理性で保て！！ ノク
ターンじゃないんだぞ！？」

茶々丸「ガイノイドでも、魂があれば人だと言ったのはマスターで
す。 それにもう……抑え、れ……」

カスミ「落ち着け、物語は始まったばかりだぞ？」

茶々丸「これから三年もマスターと同室なんて……私に壊れると！
？」

カスミ「お前はすでに（いろいろな意味で）壊れてるからな！！」

オチなし

マスターと同室だなんて、私の理性が耐えられない！

三人称

あいえず
IS。

正式名称『インフィニット・ストラトス』。

宇宙空間での活動を想定して、作られたマルチフォーム・スーツ。しかし、制作者の意図とは別に宇宙進出は一向に進まず、結果このスペックを持って余した機械は『兵器』へと変わり、しかしそれは各国の思惑から『スポーツ』にと落ち着いた……所謂、飛行パワードスーツになった。

しかし、この『IS』には致命的な欠陥があつて、女性にしか動かせないのだ。

だが、それは先日までの話。

男でISを動かした者が居た。

世界はこの大スクープで、大騒ぎした。

だが、この大スクープに隠れて小さいとは言えないが、小さく新聞に載っていた。

それは……………

昨日、日本時間の20時頃にアメリカの調査団が、『南極』で熱源反応があるのを確認した所、『所属不明の研究所』を発見、中に『少女とIS』も発見した。

同時刻、ロシア調査団も『北極』で『所属不明の研究所』を発見、『南極の研究所』と同じモノと思われる。

さらに、中に『女性型アンドロイドとIS』も発見した。

しかし、この記事は上記のスクープによって、TVで上げられる事は無かった。

そして、ロシアは北極で見つけたアンドロイドと、ISの調査をIS学園に丸投げした。

アメリカでも南極で見つけた少女と、ISの調査をIS学園に丸投げした。

本来ならば、研究員達は南極、北極で見つかったISにも興味を持ち、調べるはずだが……それは神と呼ばれる存在達によって、意識をISを起動させた男に向けさせたのだ。

そして、彼女達はIS学園で再会を果たした。

三人称

茶々丸 視点

皆さん、こんにちは。若しくは、おはようございます、こんばんは。

私の名前は、絡繰 からくり 茶々丸 ちやちやまる と言います。

この作品の主人公です。

「茶々丸、ご飯に行くぞ。このあとは、あの最強に会っんだ。時間が惜しい」

「はい、マスター」

金髪のポニーテールの赤い双眼をした、リリカルでマジカルなキ

ヤラ、フェイト・テストロツサ・ハラオウン似の女性が声を掛けてきます。

そんな彼女は、私のマスター……

……カスミ・ヴェネーラ様。

私達の世界では最上級最強クラスの上、無敵クラスというのがあり、その無敵クラスに君臨する方です。

ちなみに、この作品のメインヒロインというか私の主^{おっと}！ フツフツ……貴史様以外渡しません！！

「早く来い……」

と、そろそろマスターの堪忍袋の尾が、切れそうですね。

手を向けて、魔法の射手^{サキタ・マギカ}を放つ一歩手前とか……まあ、放たれても問題ありませんが……。

というわけで、食堂。

現在6時。

織斑先生から、呼び出しを受けた時間は7時。

今から作って、食べてもギリギリですね。

急ぐとしましょう。

朝食の支度をしてるおば^s

……スカーンッ！

何故か包丁が飛んで来ました。
びっくりです。

しかも、投げたのは食堂の……………綺麗なお姉さん達（という名のおばさん）。

「茶々丸ちゃん……………」

「すみません、綺麗なお姉さん達」

「それで良いんだよ」

さて、朝食を作りましょう。

お姉さん達の邪魔にならないよう朝食を作り、マスターの下へ行きます。

今日の朝ご飯は、炊きたてほかほかの白ご飯に、味付け海苔、みそ汁、焼き鮭です。

完成した頃に綺麗なお姉さん達が、味見役（という名のつまみ食い）をしてあげると言われ、半ば強制的に食べられました。

そして、勝手に評価されたりと……………はあ。

ちなみに綺麗なお姉さん達の感想は、焼き鮭では少し塩が効き過ぎで、みそ汁は味噌が濃いとのこと。

しかし、マスターは味が濃い方が好まれるので、これで良いんです。

食事を終えて、いざ職員室へ！！

・・・よじよじ

と、言おうとしたらマスターが私をよじ登って、私の肩にぶら下がると、言おうとしたらマスターが私をよじ登って、私の肩にぶら下がるような体勢を取る。

「……………」

「全速前進DA」

……………はて？ 何がしたいのでしょうか？ よもや飛べと？ 校則違反では？ あ、自力で飛べと……………貴女も飛べるでしょう……………。

まあ、言いたい事はたくさんありますが、とりあえず……………

・・・グイッ、ガシッ！

「お？」

マスターをお姫様抱っこです！ あのまま飛ぶと、落ちかねませんし……………。

では、改めて……………

「茶々丸、飛びます」

GNドライブを起動させ、魔力開放にしか見えないようにGN粒子を散布。

そして私は……………いえ、私達は飛んだ。

……バシッ！！×2

「……………」

「ブッ……」

「学園内で飛ぶな、馬鹿者共！」

職員室に着いて、私達が待っていたのは織斑先生の出席簿アタック。
なにやら、マスターの多重障壁を無視してダメージを与えてましたが……。

「貴様、織斑 千冬……！」

……ズバンッ！

マスターが織斑先生に何か言おうとすると、二度目の出席簿アタック。

「織斑先生と呼べ。小娘に呼び捨てされる覚えはない。あと、敬語を使え」

「こゝ、こむ……私が小娘……」

「マスター、落ち着いて下さい」

絶対言っではいけないワードを、言おうとするマスターを落ち着かせる。

マスターの気持ちはわかりますが、堪えて欲しいですね。

真祖の吸血鬼で、六百年生きてるだなんて間違っても、知られてはいけません。

「確認するが、お前達が南極と北極で見つけた人間でいいな？」

「私はガイノイドですが、概ねそうです」

「フンッ…そうだよ」

…バコンッ!!

「づう……」

三度目の出席簿アタック。

段々と、威力が上がってるように見えます。

「年上を敬え、わかったな？」

「人が手を出さないと…:…:…:というか、真祖の障壁を無視するな!! 貴様は魔法無効化能力者か!？」

…ブンッ! ガシッ!!

「!?!」

四度目の出席簿アタックは、マスターが織斑先生の腕を寸前で掴み止める。

流石は、私のマスターです。

織斑先生も驚いてますし、ただ失敗したのは……

「真祖だと？ 障壁とはその薄く脆い壁か？ あと、敬語を使い」

「「!!」「」」

これは驚きですね。

マスターが張り巡らした障壁は、普通は見えない。

魔法使いであれ、魔族であれ、一般人は余計見る事は出来ないのに……。

「見つかった場所が違うにも関わらず、互いを知ってる風話す様子。そして、真祖という言葉に障壁か……詳しく聞かせてもらおうぞ」

「チツ……」

これは面倒な事になりましたね。

茶々丸 視点

もう茶々丸が手遅れかもしれない(前書き)

茶々丸「マスター可愛いよ、マスター……ハアハア」

カスミ「……………私は茶々丸の育て方を間違えたかもしれん」

茶々丸「もう堪らん！」

カスミ「帰ってこお おおおい！！ 全速力で！！」

オチなし

もう茶々丸が手遅れかもしれない

茶々丸 視点

「では、説明してもらおうぞ」

マスターが口を滑らせたお陰で、面倒な事になったマスター。どうやって、誤魔化すのでしょうか？

「怠いなあ、茶々丸が説明しろ」

.....は？

「あの、マスター？」

私が戸惑っていると、マスターは首を傾げて「どうした？ さっさと説明してやれ」と、言わんばかりの表情を見せてくれました。

いや、だから何故私が？

「良いじゃないか。めんどくさいんだ」

.....はあ、しょうがないですね。

「では、マスターに代わって、私が説明します」

というわけで、説明中〜。

今回の事で、私が説明するのは私達が科学と魔術、魔法が発展した古代文明時代の人達による産物で、科学では私が生まれ、魔術ではマスターが真祖の吸血鬼として、生まれた存在ということにしました。

そして、ISの事は強化装甲という風に説明し、古代文明時代の科学の全てが詰まってると言うことに話しました。

ぶっちゃけ、私達のISは魔術に近いモノを武装としてありますし……。

「古代文明、真祖の吸血鬼……そんな馬鹿げた話を信じると？」

「信じてもらおう以外ありません」

「……………（絡繰の表情が読めんな……………まあ、アンドロイドだから仕方ないとして、絡繰が説明してる時のヴェネーラにもこれといった反応は無し。絡繰を信頼してるのか、本当の事が……………判断がつかん）」

「なんだ、随分と疑ってるじゃないか。　なんだつたら、魔法の一つや二つ見せても良いぞ？」

まあ、織斑先生が疑うのも無理はありませんね。

しかし、本当の事は決して言えない。

神とその従者が、この世界を救う為に来ましたなんて言った暁には、もれなく精神科の病院と腕利きの技術師を紹介されます。

「それは後で見るとして、何故今頃になって発見された？」

「知るか」

「わかりません。この時代の科学が一定レベルに達したからかもしれませんが、偶然この時代まで発見されなかったかもしれません」
「では、発見した国が詳しい検査をせずに、IS学園に送って来たのは？ あの話が本当なら、IS学園^{こゝ}なんかには送られないはずだ」
「私達の検査を行われる直前、男がISを起動したから、私達の検査はどうしても良くなったんだろ」

これは、運命の女神が介入した結果。
これから私達が、スムーズに行動出来るようにと……。
まあ、この時点で阻害されてますが……。

「……………はあ、頭が痛いな」

「私も、まだ頭が痛いんだが……………」

そう言っつて、織斑先生はこめかみを抑え、マスターは叩かれた頭を摩った。

ああ、頭を摩るマスター……………まるで、脅えてる子供みたいで可愛い。
い。

「ん？ そろそろ、SHRが始まるな。一応、放課後に魔法とやらを見せてもらう。話は以上だ。すぐ教室へ行け」

「フンッ……………」

「失礼しました」

扉の前で、頭を下げて私達は取調室を出ます。

何故、取調室があるのか疑問ですが、まあいいでしょう。

一年一組。

これから一年共に過ごす教室。

私達が教室の中に入って、すぐに教師が入ってきた。

しかし、その教師は何と言うか身長低め、着てる服のサイズが合
ってない。

エヴァンジェリン様が見たら、怒りのあまり先生が着てる服を剥
いで、サイズ合わせをしそうですね。

「お前ならともかく、エヴァはしないだろ」

「私はマスターのしかしません。あと、地文を読んではダメです」

「し、私語は慎んで下さい」

「すみません。ウチの子が」

「いつから、私は貴様の子供になった!?!」

私が先生に頭を下げると、マスターは机を叩いてツッコミを入れ
る。

ナイスツッコミです、マスター

- - グッ!

「良い笑顔で親指を立てるな!!」

「静かにしてくっだっさい」

「マスター、お静に……」

「誰のせいだと思って……おい！ 首を傾げるな!! 貴様のせいだろ!!」

やれやれ、人のせいにするなんて……まったく、マスターに従順な私がマスターに何をしたと？ 言い掛かりもやめてもらいたいです。

「後で巻いてやる」

……ゾクリ

ああ、マスターから^{ほし}進る魔力が堪らない。

「さっさとSHRを始めろ」

「は、はい!! え、え〜では……まず私の自己紹介からさせていただきますね？ 私はこの一年一組の副担任で、^{やまだ}山田 ^{まや}真耶と言います。担任の方は、今会議中として紹介は後になります」

山田 真耶先生ですか。覚えやすい良い名前ですね。

その、子供っぽい雰囲気も良いです。愛でたい。ハッ!?

「浮気じゃありませんので、安心して下さいね？ マスター」

「何に対して安心しろと？ あと、たまに茶々丸の言ってる事が理解出来んのだが」

「え、えと……あの、私語は慎んで下さい。良いですか？ 良いですよ？」

「はいはい、わかったわかった」

「絶対ですからね！？ では、今度は皆さんの自己紹介をお願いします。 えっと、出席番号順で」

山田先生の必死の説得(?)で、私達は私語を慎んだ。最初っから従ってれば良かったんですが、これは不可抗力というものなので、諦めてもらいましょう。

しばらく自己紹介が進み、この学園内で唯一の男子生徒の番となりましたが、いつまで経っても自己紹介する気配がない。どうしたのでしょうか？

「……………」

「織斑 一夏くん。お」

「…バンツ!!」

「ひゃうっ!?!」

「……………」

「な、なんだ？ 敵襲か？」

突如、教室内で何かを叩く音がした。

クラスメイト達は何が起きたのかと、私の前の席に注目する。

そう、我がマスターのカスミ・ヴェネーラ様の席に……。

「さっさと自己紹介しろ、無駄に時間を浪費するな」

「え？」

マスターの言葉に、何を言ってるのか理解出来ずに、キョロキョロと辺りを見渡したあと、自分で自分を指差す。

「貴様以外に誰が居る！！ 自己紹介で、『あ』から始まって今『お』の貴様の番なんだよ！ 時間を見る！ もうすぐ一時間目になるんだぞ！！」

「え、あ、わりい！！」

マスターの迫力に圧されてか、マスターの説明を理解したのかわかりませんが、織斑 一夏と呼ばれた青少年は、ガタツと立ち上がって名前だけ言うといった、簡潔な自己紹介をした。

簡潔なのは良いことですが、もうちょっと何かないのでしょうか？

- - パアンツ！

そして、朝から聞き覚えのある音が、一夏さんに炸裂しました。

一夏さんの後ろには、先程まで会っていた織斑先生が居ました。

「げえっ、関羽!？」

- - パアッ!

一夏さんが織斑先生を見て、彼の三国志で有名な武将の名前を言ったあと、さらに一発。

マスターに引けを取らないほど、アタック数（つまりは、攻撃された数）。

「マスターのライバル出現ですね」

「何を言ってるんだ？」

私の呟きに、答えるマスター。

呆れてるにも関わらず、ツッコミを入れるマスターが大好き!!
今夜は寝かせません!!

「……………はあ、なんだか貞操の危機が」

このあと、遅れてきた担任……………つまりは織斑先生の自己紹介が終わったあと、女子生徒暴走。

織斑先生の下の名前を様付けから始まり、ずっとファン宣言、九州から来たなど、終いには織斑先生のためなら死ぬるとか……………理解不能。

確かに、私はマスターの為ならなんでもします。

ですが、マスターの為に死ぬと言われたら、私は拒否しますね。

私が死なずに済む方法を模索します。

「……………毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か? 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてる

のか？」

織斑先生のぼやきに、また女子生徒から叱って！ 罵って！ 時には優しく、そしてつけあがらないように躡をしてゝなど……正直、聞いているこちらもうざいですね。

とりあえず、ご苦労様です。と心の中で言っておく。

そして、一夏さんに三度目の出席簿アタック。

本当に早いですね。もう、三度目ですか……。

そこから、一夏さんと織斑先生が姉弟ということがバレて、さらに騒ぎが起きてSHRギリギリまで始終煩かったのは言うまでもない。

ちなみに、自己紹介は織斑姉弟で止まったままとなった。

マスターの出番を奪うとか！！ 彼は敵ですね！！ せつかく高画質の録画を準備してましたのに……。

そして、一時間目のIS基礎理論授業が終わり、休み時間。

「ふわあゝ……退屈な授業だった」

「マスターは、もう少し授業を取り組む意欲を持った方が良いかと」

何しろ。このやる気0のマスターは、山田先生の注意を五回は受けてる。

何故、こつまでやる気が無いのか……貴史様が居ないからですね。

「ちょっと、よろしくて？」

「よろしくない」

「すみません。現在、マスターは慣れない授業で疲れていますので、時間を頂けないでしょうか？ どうでしょう、その間に国へ帰省なさっては」

私の幸せ（主にマスターとの会話とか、マスターとの食事とか、マスターとの情事とか、マスターの……）コホンツ：失礼しました。とりあえず、私の幸せを奪う輩は例えイギリス代表候補生だろうが、金髪ドリルだろうが、巷でちよろいと言われてる人だろうが許しません。

「貴女達！ 馬鹿にしていますの、わたくしを誰だと思っってますの！？」

「してない」

「ヒステリーを起こさないで下さい。マスターの可愛らしい耳が逝かれます。」

（なんだ？ 随分と毒舌だな……）

「な、ななな……く、屈辱でs……」

そもそも、この人。ウザ……ウザいですよね。

私は、ああいうお嬢様は嫌いなので……。

その点、マスターやエヴァンジェリン様は最高です！ 身内轟頂な気もしますが……。

何が最高かと言うと、マスターのあの気怠い雰囲気全開なところ。嗚呼、お世話したい。尽くしたい。愛でたい。抱きしめたい。たべたい。

(なんか、悪寒がハンパない……。私はいつか茶々丸に襲われ……。すでに襲われていたな。マウス・トウ・マウスで、口を蹂躪されたっけ……………)

エヴァンジェリン様なんか、あの未熟児な身体！ たまに見せるドS全開の笑顔(姉さんは悪の顔と言ってましたが)、全身に滲み出るマスターへの愛、貴史様によるマスターを陰から、目に涙を溜めて見つめてて……。もう、ダメ……………。

エヴァンジェリン様を屈服させたい！！

(もう、ダメかもしれんな、茶々丸)

「……………って、聞いてますの!?!」

「聞いてない(ません)」「」

私達が金髪さんの質問に答えると、金魚みたいに口をパクパクさせて、滑稽ですね。

「こ、このイギリス代表候補生にして、入試主席のセシリア・オルコットを……………」

「入試主席？ 雑魚を倒しただけだろ？」

「なんの自慢にもなりませんね」

「な、なら貴女達は…」

「私達は入試せずに入った」

なんせ、IS学園の代表候補生みたいなモノですしね。

本当は、南極の代表候補生と北極の代表候補生ですが……。

え？ 二つとも国じゃない？ マスター曰く、テキトーで良いらしいです。

強いて言うなら、運命の女神が介入した結果です。

便利ですね。 神様介入結果って……。

ちなみに、IS学園の代表候補生と生徒会長は別物です。

…キーンコーンカーンコーン。

「っ……！ フンッ！ まあいいですわ！！ それではごきげんよう」

チャイムが鳴り、金髪さんは自分の席へ戻って行く。

というか、何をしに来たのでしょうか？ 彼女のあの台詞とかは、

全部一夏さんに向けられるはずでは？

……まあ、どうでも良いですね。

茶々丸 視点

まずかろづがなんだろづが、世界一と着いてるから自慢だろ？（前書き）

茶々丸「いつになったら、マスターのお仕置き（ご褒美）を受けられるのでしょうか？」

カスミ（こいつもエヴァみたいになって来たなあ……。いつか放置しても悶えだしそうだ）

茶々丸「嗚呼、マスターのお仕置き（ご褒美）……。ビクンビクン」

カスミ「……………（げんなり）」

茶々丸「あ、マスター……………そこは……………」

カスミ「昔はいい子だったんだよ……………昔は……………昔はな……………」

オチなし

まずかろつがなんだろつが、世界一と着いてるから自慢だろ？

茶々丸 視点

「……であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によつて罰せられ……」

さて、なんやかんやで二時間目。

現在、山田先生が教科書を読んでいます。

マスターは授業を聞く気はないのか、窓の方をジーツと見ており、それを見た山田先生が注意したりもしますが、まったく前を向こうとしません。

まあ、マスターも私も教科書は丸暗記したので、改めて言われなくてもわかってますがね。

しかし、織斑先生が動かないのは何故でしょう？ 止められるから？ いや、それでも出席簿アタックはしそうですか……謎です。

「織斑くん、何かわからないところがありますか？ わからないところがあったら、言ってくださいね。なにせ私は先生ですから」

授業がしばらく進んで一夏さんが不審者の如き、挙動不審な行動に気付いた山田先生は、一夏さんに聞いてきた。

一夏さんはしばらく考えたのち、勢い良く手を挙げて……

「ほとんど全部わかりません」

と、正直に暴露。あまり褒められたものじゃありませんね。

それはさておき、一夏さんの衝撃のファーストカミングアウトを聞いた山田先生はと言つと……

「ぜ、全部、ですか……？」

と、困りました的な顔をしています。

「え、えっと……織斑くん以外で、今の段階でわからないっていう人はどれくらいいますか？」

――シーン

わからない人が居ないか確認する山田先生。

しかし、元々此処に居る女子生徒は自らこの学園に入りたいと思つて入試を受け、受かった人達（私とマスターは入試してませんが）。

もっと後の事ならわかりますが、今の段階でわからない者は居ないかと……。

「……織斑、入学前の参考書は読んだか？」

と、今まで教室の端で控えていた織斑先生が、一夏さんに質問するも「古い電話帳と間違えて捨てた」と答え、出席簿で叩かれた。

「アホだな」

「アホですね」

二時間目の授業が終わり、休み時間。

金髪さんは一夏さんの方へ向かって、また自分自慢を話しています。よく飽きないものです。

「茶々丸、今日からISでの戦闘訓練をするからな」

「はい、マスター」

ISの戦闘訓練……このまま戦った方が楽なんです……仕方ありませんね。

郷に入っては郷に従え……と、ありますし……。

「それにしても、本当に魔法を見せるんですか？」

「ああいう手合いは、実物を見せるに限る。にしても、なんだ？」

私のIS……私の魔力もエネルギーに変換するみたいだが……」

「私の方も戦いながら、エネルギーを補給出来るみたいです。私のエネルギーをですが……有効打を与えるには、オーバークイル並の威力じゃないと無理ですね」

「やはり、あいつの造るモノは妥協がないな……」

むしろジエイル様はなんの為に、これを造ったのでしょうか？ 謎です。

――キーンコーンカーンコーン

あ、チャイムがなりましたね。
三時間目は、どんな授業なのでしょう。

「それでは、この時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する。あと私の授業くらい、前を向けヴェネーラ」

・・・ズガアンツ！

「づう……」

まさかのフェイント！！……え、先程どのような事が起きたかと言いますと、織斑先生が窓の方を見てるマスターに向かって、出席簿を落とそうとしたらマスターが、織斑先生の腕を掴み止める。しかし、織斑先生はそれを予想してたのか、驚く間もなく至近距離でのチヨーク投げ……。

音からして凄まじい威力です。これがこの世界最強の力……。しかも、展開してる魔法障壁は織斑先生によって解除される始末。彼女は何者でしょうか？

「と、授業を始める前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

クラス代表……委員長さんみたいな感じでしょうか。
出来れば、マスターになって頂きたいですね。
もっとも、無理でしょうが……。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。 対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。 ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。 今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。 一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

確実に無理ですね。

マスターは面倒事を避けますし、まあこのまま行けば一夏さんが推薦されて、それに反対した金髪さんが反対。

そして、決闘する事になって一夏さんがその決闘に負けるも、クラス代表になるって流れですが……。

何かイレギュラーがあつて、金髪さんがクラス代表になるかもしれません。

そうなつてしまつたら、私は耐えられません。

ならば此処は二次創作みたいに、マスターも出てもらいましょう。

「私はマスターを推薦します」

「なっ!?!? 茶々丸、どういう事だ!?!?」

私の発言に、マスターは立ち上がつてこちらへ振り向く。

その瞳には……………

『めんどくさいだろ!?!?』

と、書いてありました。

「ヴェネーラ。 席に着け、あと拒否権はない」

「なら、私は茶々丸を推薦する!?!?」

「なっ！！ 正気ですか、マスター？ 何故、私が……………めんどくさいじゃないですか！！」

- - がたたつ

「私だつてめんどくさいわ！！」

？ どうしたのでしょうか？ 皆さん椅子から転げ落ちて……………。
あと、マスター。 少しうるさいですよ？

「とりあえず席に着け、ヴェネーラ……………他にはいないか？ 自薦他薦は問わないぞ」

「なら、織斑くんを推薦します！」

「私もそれが良いと思いますー」

「では候補者は、織斑 一夏とカスミ・ヴェネーラ、絡繰 茶々丸
だな」

織斑先生の言葉に、原作と同じく一夏さんが推薦される。

これでは……………

- - バンッ

そら来た……………。

「待つてください！ 納得がいきませんわ！」

机を叩いて立ち上がった金髪さんは、怒りに満ちた顔で私とマスタ―、一夏さんを睨みつけたあと自分の意見を言い出した。

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ 当然！ そちらにいる人達もです！ クラス代表はそのクラスの実力トップがなるべき、そしてこのクラスで一番強いのは、このわたくしに他ありませんわ！！」

井の中の蛙かわずとは、こういう人のことを言うんでしようね。

とても哀れです。 と、まあ私達はISすら動かしてないのですが……まあIS使わずに制圧出来ますし、どうでもいいですね。はい。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとって耐え難い苦痛で……」

だから、先程国に帰るよう言ったじゃないですか……。

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。 世界一まずい料理で何年覇者だよ」

金髪さんの言葉に頭にきたのか、一夏さんはイギリスを侮辱（？）……事実ですよ？ まあイギリス人にとっては侮辱なんですよ（う）する。

「織斑 一夏……」

「ん、なんだよ……えっと……」

「カスミで良い。 イギリスの国自慢自体が、世界一まずい料理な

「んだろ？　まずくても、覇者になれるんだぞ」

「ああ、なるほど！」

ポンツと掌てのひらに、握り拳を軽く叩く。

「あつ、あつ、あなた達ねえ！　わたくしの祖国を侮辱しますの！
？」

「先に喧嘩を売ってきたのは、どこのドリルだ？」

「っ！　決闘ですわ！」

「おう。　いいぜ。　四の五の言うよりわかりやすい」

「それで満足するならいいぞ」

金髪さんの言葉に、マスターも一夏さんもやる気満々。
そこからハンは必要かとか、負けたら奴隷だとか……まったく
面白いことを言いますね、あの金髪は。

「話はまとまったな。　それでは勝負は一週間後の月曜。　放課後、
第三アリーナで行う。　一夏とヴェネーラ、絡繰、オルコットはそ
れぞれ用意をしておくように。　それでは授業を始める」

ぱんつと手を打って織斑先生が話を締める。

一週間……ですか。　楽しみですね、ええ。

そして、放課後。

私達は第一アリーナで、織斑先生と一緒に居た。

「では、魔法とやらを見せてもらおうか」

「^ま的を出せ」

マスターの命令に、山田先生がISの訓練でよく使われる標的が五つを出す。

標的が出たのを確認して、マスターは自身の体内から魔力が溢れ出させる。

・・ゴオオオオオオオオオオ……

それはまるで台風のように辺りに吹き荒れ、マスターと私を除いたアリーナ内に居る山田先生は機械にしがみつき、織斑先生は腕を組んでなんとか立っていた。

流星は世界最強と呼ばれる方です。

「レク・リク・ラク・ライネック…漆黒の精霊5柱、集い来たりて敵を撃ち抜け、魔法の射手！ 連弾・漆黒の5矢！！」

黒い球のようなものがマスターの周りに現れ、マスターが呪文を完成させると黒い球はレーザーとなりの^ま的を撃ち抜いた。

「……………」

初めて魔法を目にした山田先生は、口をあんぐりと開いたまま驚

いており、織斑先生は表ではなんの変化も感じられませんでした。が、体温の低下に心拍音が異常に跳ね上がったのを、私の目と耳が感知しました。

「まあこんなもんか……。あ、それと私のISには、こんな機能もあるぞ」

そう言っつて、マスターは自分のISのデータを開示して、織斑先生に見せた。

「搭乗者の魔力供給により、ISのエネルギーを回復し、またISを通して魔法の使用が可能だと？」

「ちなみに私の専門は殲滅だ。威力は、ユーロシ大陸を壊滅させる事が出来る」

「嘘……」

マスターの補足に絶望する山田先生は、こうなんと云いますか……庇護欲を駆り立てるといふか……。もう、可愛いです。

そうそう、マスターの発言はブラフではなく本当です。

マスターは星との契約をしており、いつでも星から魔力を貰う事が出来ます。

それも、撃った直後はその星に良い面で影響を与えますから、じやんじやん撃ってます。

どう、影響を与えるかと言うと標的は破壊し、星は自分の魔力を吸収し、少しだけ地表に還元（栄養を与える感じですよ）して、放たれた部分には緑が出来ます。

地球再生には、持って来いですね。

「なら、今後その機能は私の許可が降りた時だけ使え。いいな？」

「別に構わん」

「それで？ 茶々丸はないのか？ ヴェネーラみたいな特殊スキルは」

あると言えばありますね。超科学の産物がゴロゴロと……。これは言っても良いのでしょうか？

「先に言っておいた方がいいぞ？ あれは私よりも凶悪だからな」

「了解です。それでは……私が所有するのは超科学の産物。I S以上の兵器を兆を超える数を持っています」

「何!？」

「あの、そ、それって……」

「文明を滅ぼすどころか、星さえも死の星と化します」

「私を使う最大魔法は人類にとっては悪いが、星にとっては良い影響でしかないモノだ。これが私よりも凶悪という理由だ」

さて、相手側の反応はどうでしょうか。もし封印とか言われたら、私……私……人類を滅ぼしたくなります」

「声が出てるぞ」

「失礼、わざとです」

マスターのツツコミを華麗に回避！

「はぁ……山田君」

「は、はい！」

「私達は何も見てないし、何も聞かなかった……いいですね？」

これはこれは黙って頂けるとは、僥倖じやうじやうですね。

面倒でなくて良い！！

「でも、良いんですか？」

「絡繰も馬鹿じゃない。そう簡単に星を滅ぼすような事はしない

……だろう？」

「はい」

マスターの命令ならすぐやりますが……。

「だったらそれでいい」

「織斑先生がそう言うなら……」

これで問題は解決。あとは一週間後の決闘に、イレギュラー退治ですね。

「あ、ヴェネーラ。血はどうする気だ？ 吸血鬼なんだろ？」

「確かに吸血鬼だ。だが真祖はそこいらに居る吸血鬼とは違って、血を飲まずとも生きていけるのさ」

「そうか、安心した。では解散！」

こうして、私とマスターの学園生活一日目は終了した。

まあこのあとは夕食を食べ終わって、ダイオラマの魔法球で一週間（勿論、ダイオラマの魔法球内の時間で）過ごしながらISSバトルですが……。

茶々丸 視点

Q (クエスチョン)、楽にIS稼動時間が稼げる方法は？

A (アンサー)

茶々丸「便利ですね。私とマスターの愛の巢」

カスミ「この機体性能はチート過ぎるが……まあジェイルが作ったものだしな」

茶々丸「マスター？」

カスミ「さて、シユロウガの調整を」

茶々丸「マスターが私二振り向カナイナンテ、ソナノ私ノマスタージャナイ」

カスミ「……………待て！ 茶々丸！！ チェンソーを持ってどうする気だ！？」

茶々丸「ボソボソ」

カスミ「え？ マスターの四肢を切断して頭を抱きしめ抱える？
恐っ！！」

茶々丸「読者様に質問です。私たちのISのデータを詳しく知りたい方は、おっしゃってください」

カスミ「どうやら素に戻ったみたいだな」

茶々丸「マスター？」

カスミ「ヒッ!？」

オチなし

Q (クエスチョン)、楽にIS稼動時間が稼げる方法は？

A (アンサー)

茶々丸 視点

皆さんこんにちは、若しくはおはようございます、こんばんは。現在、私はマスターと一緒にダイオラマの魔法球の中に居ます。

「それじゃあ、起動させるか……」

「はい」

マスターの指示に従い、懐から星のエンブレムが着いてるグローブを出して、手に着ける。

マスターは、黒い指輪を指に嵌めています。

出来る事なら、私がマスターの左手の薬指に嵌めたかった。

「ん？ ………………はあ」

何を思ったのか、マスターは指輪を外して私の方へ渡してきました。

これは一体……………

私が首を傾げると、マスターはやれやれと言った具合に手を差し伸ばす。

しかも、差し伸ばした手は左手！！ これはもしや！！ と思いきマスターの顔を見ると、羞恥で真っ赤に染まったマスターの顔で……

「着けてくれるんだろ？ 早くしろ」

と言つてきて、なんとというか私は幸せ者だと思えます。

思わず抱きしめて、ノクターンに載るような行為をしましたが、後悔はありません。

指輪？ 勿論着けましたよ。マスターの左手の薬指に……。

まあ行為に及んだあと、マスターにしっかりお説教もらいましたが……。

「はあ……それじゃあ起動させるぞ」

「はい、マスター。それと溜息すると幸せが逃げますよ？」

「誰のせいだ!!」

誰のせいでしょう？

「首を傾げるな!!」

「まあ漫才はそのくらいにして、グローリー・スター栄光の星起動」

「たく……来い、シユロウガ漆黒の風」

待機状態のISが私達の声に反応して、輝き出して光が私達を包み込む。

光が止むと私の体に青い装甲が纏われ、機体よりも大きな武装（武装欄を見るとガナリー・カーバーと書いてるので、以降はガナリー・カーバーと表記）を片手で抱えてる状態で現れる。

マスターは私とは違い、フル・スキーン全身装甲で背中にはウイングが付いてお

り、手には実体剣を持ってそこにいた。

ただ、漆黒の風に似つかわしくないほど、その機体は白かった。

「……………ふむ、ISとして完成してると思ってたら一次移行ファースト・シフトすらしてなかったのか」

「こちらもです」

「まあジェイルが造ったモノだ。深く考えるのは止めよう」

「そうですね」

「じゃあ各機、一次移行するまでこいつらを理解するぞ」

「了解」

と、いうわけで武装やスペックなどを見ていく。

武装はレイ・ピストル、ストレイターレット、レイ・ストレイターレット、バーレイ・サイズ、ジャック・カーバーですね。

次は各武装の詳細データを、レイ・ピストルは射撃型ビーム兵器、ストレイターレットは実弾型ライフル、レイ・ストレイターレットは高出力の射撃型ビーム兵器、バーレイ・サイズは鎌状の高出力の格闘型ビーム兵器、ジャック・カーバーは実体剣ですか。

結構、応用が利く武装ばかりですね。　　というかこの武装……………ス

ーパイロボット大戦Zの主人公の機体ですね。

機体名……バルゴラ？ 待機状態と起動状態と名前が違うんですね。

スペックの方はどうで………え？ 嘘………飛行機能無し！

？ スラスターを最大出力で動かせば、飛んでるISに格闘戦を仕掛けられますが、避けられるのがオチでしょうね。

一次移行に期待するしかないですね。これが本当にバルゴラなら………

茶々丸 視点

カスミ 視点

さて、起動させたはいいが………何故サイバスターなんだ？ この機体はシュロウガだろ？ まあいい、武装欄を調べてみるか。

武装はカロリックミサイル、デイスカッター、ファミア、サイフラッシュ、アカシックバスターか………アカシックバスターの詳細を見る限り、武装というより技に近いな………。

まあいい、次は武装の詳細データだ。カロリックミサイルは高威力のミサイルみたいだが、他のISが使うミサイルの威力よりちよっと上くらいか？ まあ、牽制には使えるか。

デイスカッターは実体剣か………実体剣としか書かれてないってどうなんだ？ 次はファミアか………これは遠隔操作型の特殊兵装みたいだな。

という事は第三代機にあたるのか？ これは………。
サイフラッシュは敵味方の識別可能な兵器か………。

完全に第三世代機だな。 ん？ もしかして、第四世代か？ よくわからんな……。

アカシックバスターは魔法陣を展開して、火の鳥を召喚するか……これは人前で使っていいのか？

スペックについては、飛行可能でエネルギーは私の魔力でいくらでも満タンに出来る。

まあ、これは千冬の許可が必要な機能だな。変形してサイバードになる事で、機動力が大幅にアップ。

移動速度については、最大加速で光速を超えて擬似的な時間移動が可能って、常人が乗ったらミンチじゃないか！！ 絶対防御とかは、普通のISより強めにしてあるがそれでも大概だな。

さて、一次移行はだいたい30分。 残りは27分か……少し動いてみるか。

それから27分後。 茶々丸と一緒に基本動作を行い、ISに慣れて行った。

そして……

・フォーマットとファイティングが終了しました。 確認ボタンを押してください。

と、意識に直接データが送られると同時に、目の前に「確認」と書かれたボタンがあるウィンドウが現れた。

そのボタンを押すと、先程よりも膨大なデータが流れ込む。

そして、その膨大なデータの中には「人の罪」「人の業」そして

「人が辿り着く終焉」のデータがあった。
それらを見せるのは、一次移行に入って得た力の一部という事に、
どこか理解した。

- - キイイイイイイ

サイバスターは徐々に強く発光したが、しばらくしてその光は弾
けるように消えて行った。

そして、光から現れたのはサイバスターよりも装甲が薄くなった
が、全身装甲なのは変わらなかった。

あと変わったと言えば、白銀から漆黒に変わったぐらいだろう。
完全にシュロウガとなっていた。

茶々丸の方を見ると茶々丸も一次移行を終えたのか、茶々丸が纏
ってる装甲にV字型のウイングが追加されており、ガナリー・カー
バーも生物的なデザインに生まれ変わっていた(.....)。

まあなんにせよ。

「これからよろしくな、シュロウガ」

カスミ 視点

三人称

一次移行を果たしたシュロウガとバルゴラ・グローリー。

だが、すぐに模擬戦をしようとせず茶々丸はさっきまで出来な
かったISでの飛行練習をして、カスミは亜音速から音速の間で試

験飛行して急降下と完全停止を行い基礎力を上げていた。
普通の人間なら、骨が目茶苦茶になっていただろう。
流石は吸血鬼である。

しばらくして飛行練習で慣れた茶々丸もカスミと一緒に基礎力を鍛えて、軽くISで鬼ごっこをしたりした。

鬼は当然……………

「ああ、マスターから仄ほのかに香る良いにほい」

「変態っぽい事を言うな！！　というか、全身装甲の私に匂いを感じるのか!?!」

「嗅ぐんじゃない、感じるんだ!!!」

「ブルー・リーに謝れ!!!」

変態と化した茶々丸だった。必死に逃げた結果、カスミはバード形態じゃないにも関わらず、音速を超えて光速の触りに触れたとか触れてないとか……………。

余談ではあるが、茶々丸のISであるバルゴラ・グローリーは頑張っても音速までなのだが、光速化していたシュロウガ（人型形態）に何故か迫っていた。不思議である。

鬼ごっこを強制的に終わらせて（どうやって終わらせたか、気にしてはいけない。）、「ダイオラマの魔法球の最初の一日は終了した。

ダイオラマの魔法球、二日目。

カスミは茶々丸が作った料理を食べ、食べ終わると茶々丸へ魔力を与えるためにネジを巻く。

この時、茶々丸はキスによる魔力供給を希望したもののカスミは昨日の事になりかねないので、その提案を一蹴した。

「それじゃあ、昨日の続きだ。一次移行を行った事で武器が変わったかのチェックだ。茶々丸のはあまり大差ないと思うが」

「了解しました」

昨日と同じようにカスミと茶々丸は、自身のISを展開して機体チェックを行っていた。

数分後、茶々丸は機体チェックを終えて、機体の調整作業に移っていた。

その後を追うように武器の扱いが変わってない事に気付くと、カスミも機体調整に移った。

しかし、機体調整と言っても強大すぎる力に、リミッターを付けるだけなのだが……。

人型で光速の領域に触れるとか、代表候補生どころか代表生でも

無理。

……………織斑千冬ならイケるか？

「さて、あとは模擬戦をやっているって微調整をするだけだな」

ダイオラマの魔法球内（もう面倒なので、今後はダイオラマ内と表記する）で昼になることに調整作業が終わり、あとは模擬戦で少しずつ調整していくだけとなった。

しかし、時間は昼。外ではいまだ夜だが、ダイオラマ内では昼なのだ。

昼になれば当然お腹が空く、お腹が空けばやることは一つ。

「茶々丸、昼食にしよう」

「イエス、マスター」

「おっと、昼食シーンはカットしないとな……………容量的に」

「なら、このあとは私の私による私のための……………じゅるり」

「お、落ち着け茶々丸……………今日はやらないからな!!」

「いただきます!!」

カット!

さて、昼食を終えて小休憩を挟み、再びISを起動させるお肌ツヤツヤの茶々丸と、げっそり搾り取られたような表情をしたカスミがそこに居た。

昼食と小休憩で何があったか、推して量るべし……。

「では、模擬戦を開始する」

「イエス、マスター」

両者、眼を合わせる。そして、同時にISを駆り激突した。

バルゴラ・グロリー（以降、バルゴラで表記）はガナリー・カーバーの銃口を後ろへ向け、そこから実体剣のジャック・カーバーが現れる。

シュロウガはディスカリバーと呼ばれる魔王剣を展開させて、ジャック・カーバーと交差する。

両機体は擦れ違うように動き、すぐにターンさせてまた切り合う。この行動を何度か繰り返したあと、両機は剣を収納させて、次にバルゴラはレイ・ピストルを展開する。

「回避行動予測……命中率は89%、撃ちます!!」

茶々丸はカスミの回避行動パターンを検索して、どこに撃てばダメージを与えられるかを割り出し、連続でビームを放つ。

「妖しき邪眼の輝き、ラスター・エッジ！」

茶々丸の精密すぎる射撃にカスミは直撃コースのビームに対し、同じビーム兵器で相殺していく。

しかし、相手はカスミを良い意味でも、悪い意味でも良く知る茶

々丸なのだ。

当然、この行動は……

「想定済みですのことよ」

「!?!」

突然、後ろから茶々丸の音が聞こえて、すぐに後ろを振り返ると、そこに茶々丸がバルゴラを加速させて突っ込んで来る。

「接近戦の極意は呼吸にあり」

…ガッシャアアアアアンッ!!

もうすぐそこまで来てる茶々丸の攻撃に回避出来るはずもなく、カスミの身体は強い衝撃に襲われた。

「ぐっうう…」

「ハアアアアアア…」

吹き飛ばしたカスミから距離を離さないと言わんばかりに追いつめる茶々丸。

そして十分近付き茶々丸は、ガナリー・カーバーを掲げて鎌状のビームを出して、X字に切り裂いた。

「チッ……………」

「ハア…ハア…………これで勝ったらマスターを…」

「!!」

初の模擬戦でダメージらしいダメージを受けたカスミは、茶々丸の狂気に満ちた眼と合いさらには、読唇術で茶々丸が口走った言葉を理解して貞操の危機に陥った。

この時、なんとかせねばという考える自分と、読唇術を学んでしまった自分を罵倒しまくってる自分を冷めた目で自分達を見てるもう一人の自分の立場で見ている。

案外、冷静なのか？

「覚悟!!」

茶々丸は止めに、ガナリー・カーバーの銃口を後ろへ向けて、実体剣を出しさらに切り裂こうとするが、そこで黙ってるカスミではない。

「シュロウガ、現状最大戦速で回避!!」

ウイングの噴射口からエネルギーを最大出力で噴射させて、上空に逃げる事で茶々丸の攻撃を避ける。

(チツ…さっきのでエネルギーシールドの半分以上持って行かれたか。さらに装甲もヤバいな……)

しかし、大ダメージを受けた後では、その代償は高かったらしく、装甲もすでに限界が近かった。

(茶々丸はダメージを受けてない分、こちら側が不利だな)

どう考えても茶々丸に勝てる要素がない。本来ならシュロウガ

の方がスペック的にも勝っており、負けるはずはないのだが相手はあの茶々丸だ。

機械と区別する気はないカスミだが、ガイノイドというステータスは侮れないのだ。

機械が故に機械の能力を最大限発揮する事が出来る。

同等の機体性能ならば茶々丸が勝る。

「チツ……認めるしかないな……」

- - 警告！ ロックされています！

シュロウガからの警告が発せられたと同時に、下から高出力の砲撃を感知した。

今から回避する事は可能だが、回避したところでこちらのギリ貧になるだけ……

「すまないな、シュロウガ……模擬戦とは言え初戦なのに負けを刻んでしまう。次は……勝とう」

- - イエス、マイマスター。次こそは……

カスミの声にシュロウガは応えた。生まれて間もなく、使われて間もないのに……それは起動し初めた茶々丸を家族として受け入れ、僅か一週間足らずで茶々丸という自我を目覚めさせたカスミの成せる業だろう。

- - ズガアアアアアアアアンツッ！！

こうして、最初の模擬戦は茶々丸の勝利に終わった。

三人称

Q(クエスチョン)、楽にIS稼働時間が稼げる方法は？

A(アンサー)

前書きで茶々丸が言ったように、茶々丸達のISのデータが知りた
い人は言ってお下さい。

IS設定を書いて投稿します。

Q (クエスチョン)、何故私がこんな性格をしてるか？

A (アンサー)、

- 原作を読む二人 -

カスミ「……………良いな」

茶々丸「どうかしましたか、マスター？」

カスミ「この鈴音という奴。エヴァみたいに弄るか……………」

茶々丸「……………可愛らしい方ですね」

カスミ「ああ、アレには勿体ないくらいだ」

茶々丸「……………遊びますか？」

カスミ「……………勿論だ」

オチなし

Q(クエスチョン)、何故私がいこんな性格をしてるか？

A(アンサー)、

茶々丸 視点

ダイオラマ六日目。 最初の模擬戦から三日過ぎました。

この三日間あらゆる状況、状態を想定しての模擬戦を行って、この世界で平和に過ごしてる人からすれば、やり過ぎと思われる程のこともしやりました。

例えば、実弾兵装使用不可、エネルギー半分または三分の一での戦い(当然、相手は満タン状態から同じ状況下だったり、こちらが有利だったり)、遠距離攻撃の相手に近距離攻撃で勝つ、特殊兵装相手に普通の兵装で勝つ等等……挙げれば切りがありません。

そして今日は、明日の模擬戦に備えて休息です。

あ、ちなみにダイオラマ外の日付は、まだ一日も経ってません。

もしかしたら、0時過ぎてるかもしれないませんが、いやはや長いですね。 一日が終わるの……。

え？ そんな事より戦績が気になる？ しょうがありませんね……。

では、期待にお応えして…… 戦績は37戦13勝12敗12引き分けです。

辛うじて、一勝だけ勝っております。

「茶々丸、メンテナンスは大丈夫か？」

「はい、マスター。 マスターへの愛とマスターからの愛が」

・ ・ ・むに

「ふぁ？」

私が喋ってるにも関わらず、マスターは私の頬をむにむに揉んだり、引つ張つたりと……心なしかマスターに怒りのオーラが見えます。

「ふ・ざ・け・る・な……！」

「ふぁふぁぁー（マスター）？」

もしかして、これはふざけてはいけない質問？ しかし、一見ふざけてる様に見えるこの解答……私の本音です。マジです。

「（うむ、よく伸びる……良い仕事してるな、ジエイル）……いか？ 此処にはお前を直せる奴は居ない！ ダイオラマ内（ここ）にあったメンテマシンだけが頼りなんだぞ！！ 頼むから大破（おおげが）だけはすなよ……！」

・ ・ ・むにむに……

なんででしょう？ 言葉はシリアスなのに行動がギャグのソレです。ボケてもOK？

「い・い・な……！」

ボケたらやられる……！！

「ふぁい」

…………… 頬をむにむにさせたままだと、普通にこう
なりますよね？

「…………… もし、大破^{おおげ}してみる…………… それでメンテマシンでも直せな
かったら……………」

マスターの魔力が上がっていく！？ あと何故シュロウガが、マ
スターの後ろに展開されてるんですか（……………）
……………？ しかも、動いてる…………… え？ 踊りだした！？

「…………… 世界を滅ぼしたくなる」

「ほ、ほれよりふあふあ（そ、それよりマスター）、ひゅほお
うははうほいへまふ（シュロウガが動いています）」

マスターの魔王になる宣言を横に置いて、後ろで踊ってるシュロ
ウガを教えると、マスターは顔を傾げ後ろを向きます。

しかし、私が思ってる以上にシュロウガは高性能で、理解力があ
りすぐにステルス機能を使って消えますってちょよ！？ 今、消えら
れたら私が！！

「…………… シュロウガなんて居ないじゃないか！！ だいたい
だな……………」

案の定、マスターの説教が延びました。そして、マスターが私
の説教に集中していると、シュロウガがステルスを解いてキングゲ
ナーの踊りを…………… 凄くシニールです。

じゃない！ マスター、後ろ後ろお〜！！

「聞ってるのか!?!」

「ふぁい!?!」

……………ふざけてませんよ? まだ頬を引っ張られてるだけです。

茶々丸 視点

三人称

ダイオラマ七日目。

茶々丸とカスミは、ISを起動させて対峙する。

今回の修行内容はリミッター無し、縛り無しの模擬戦だ。

「それじゃ、始めるぞ」

「はい、マスター」

互いに目を合わせた瞬間、シュロウガは距離を詰めた。

シュロウガの手には、この修行期間で馴染んだディスクヤリバーが握られ、バルゴラは上空へと飛びながらガナリー・カーバーから実弾を放ち、近付けさせまいと距離をとる。

「フッ!」

しかし、リミッター解除したシュロウガは、バルゴラにロックさ

せまいと不規則に動き続けながら近付く。

(やはりスペックで圧倒されますね。 ですが、今回は……………)

茶々丸は自身も戦闘形態へと移行し、シュロウガに攻撃を当て始める。

そして、茶々丸が戦闘形態へ移った事で、GN粒子がダイオラマ内を覆う。

「ゲートオープン」

「まさか！」

攻撃の手を止めず、茶々丸はさらにバルゴラを通して自分の機能を使い始める。

それは縛りも制限もないからこそ、使える機能^{ちから}。

バルゴラの左右に科学式魔法陣が現れ、そこからバルゴラのサイズに合わせた無数の兵器が現れる。

その兵器はカスミに銃口を向けて、今か今かと主の言葉を待つ。

「全兵装をガナリー・カーバーに接続。 各兵装、小型GNドライブ起動」

「ちよっ!?!? すでに造られてたのか!?!?」

カスミは驚き、すぐに頭を冷やして(むしる血の気が引いて、強制的に冷える)、最大加速で茶々丸に追い縋るが、茶々丸は自身の性能をバルゴラに相乗させて、一向に距離を縮めないでいた。

「チャージ完了……ガナリー・カーバー、ハイ・ストレイターレット……GNキャノン四基、GNバズーカ五基、GNブラスター八基、GNオーバードレイカー一基……一斉掃射!!」

十九のビーム砲が、シュロウガを飲み込もうと迫るソレは、決して良いモノではない。むしろ、トラウマモノだ。

「ええい、舐めるな!!」

しかし、別に茶々丸のバルゴラだけが搭乗者の力と共闘出来るわけではない。

「シュロウガ、私の魔力を得て魔道の術を使え!!」

……マスターからの魔力供給を確認、無限障壁を展開します。

……ズガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア……
……ンンツツツツ!!

これがシュロウガを能力^{ちから}。搭乗者のカスミの力を使い、カスミが使う魔法を使う事が出来るのだ。

そして、バルゴラとシュロウガの両機のエネルギーもまた……搭乗者からのエネルギー、魔力によって自身のエネルギーを回復させる……事実上無限に近いエネルギーを得てるのだ。

「（あの一瞬で……くっ）ならば、ツインドライブプログラム起動」

シュロウガが障壁を出して防いでるのを感知して、茶々丸はツインドライブを起動させオプシオンパーツを呼び出し、オプシオンパーツは茶々丸の背中和ドッキングして、GN粒子の生産量を二乗に

する。

しかし、それだけでは終わらない。

「TRANS - AM」

・・キユイイイイインツ！！

茶々丸がそう呟くと、茶々丸とバルゴラ、GN兵器は赤く染まっ
てその性能を極限まで高めた。

「くっ……シュロウガ！ 一気に駆け抜ける！！」

その茶々丸に対し、カスミは障壁を張ったままシュロウガをバ
ド形態へ変形（転神）させて、茶々丸に向かって駆け抜ける。

「くっ……いい加減に……」

「するのは、貴様だあああああ！！」

威力が上がっていくビームに対し、さらに障壁の強度を高めて加
速するシュロウガ。

そして、ついにシュロウガの単一仕様能力ワシオフ・アビリティーが発動した。

それはビームの中を翔かけていたシュロウガが、バルゴラ……つま
りは茶々丸の後ろに現れたのだ。

（な、に？ なんだ？ これは？ 瞬間移動か？）

しかし、ソレが発動したのはあまりにも唐突で、カスミですら混
乱していた。

「（と、とりあえず……茶々丸の後ろは取った！）シュロウガ！」

「そんな！ 後ろ！？ いつの間に！？」

後ろからカスミの声を聞き、カスミの方へ振り返るが……

「垣間見る……ヒトの歴史を！！」

すでにシュロウガは目と鼻の先で、回避する事は不可能だった。

そして、茶々丸はバルゴラと共に異空間へ引きずり込まれた。

異空間の中、それはヒトの戦いの歴史が映し出されていた。
争い、奪い、殺し、虐殺。 数多ある歴史の中で、もっとも醜い
モノが流れて行った。

「これがヒトの罪、ヒトの業……そして……」

それらが導かれるように、歴史が集まり未来が映し出された。

「……ヒトの未来を！！」

そして、場所は元のダイオラマ内に戻った。

「いったいヒトは、何処へ向かってるんだらうな……」

シュロウガは人型へと戻って、バルゴラに背を向けて腕を組んで

おり、バルゴラはボロボロになり地面へと落下していく……。しかし、ボロボロのバルゴラと違って茶々丸は気を失ってるだけだった。

流石はカスミと言ったところか……。

三人称

カスミ 視点

模擬戦が終わり、すぐに茶々丸をメンテナンスに診てもらった。結果として、茶々丸に損傷はそれほどなかった。

バルゴラについては、修復用ナノマシンが急ピッチで修復してるから、数分したら元に戻るだろう。

しかし、今回の模擬戦で度肝を抜かれたのはアレだな。

模擬戦中に茶々丸が出したGN兵器をチラリと見る。

あのGN兵器はガンムOOに出てくる兵器よりも鬼畜だ。

まあ誰もが思い付くだろうが……

「小型のGNドライブを搭載する事で、機体のエネルギーを使わずにビームを撃てる兵器……しかもTRANS-AM付きとか………まあ造ったのはうちのマッドだしな」

あと度肝を抜かれたのは、あの現象だな。

確かに私は、ビームの中を翔^かけていた。それは紛れも無い事実だ。

だが、いつの間にか私は茶々丸の後ろへ居た。シュロウガの機

能を再度調べても、特に変わったところは無かった。

アレは一体……………

「まあわからないことを、いくら考えてもわからないだけだな」

さて、茶々丸の修理が終わったら一緒に寝るか……………。

そんな事を考えながら、私は茶々丸が居るところへ向かった。

カスミ 視点

茶々丸 視点

修理も終わってダイオラマから外へ…。時刻は3時、今寝るにしてもダイオラマ内で存分に寝た私とマスターは、目が冴えており眠れない状態。

「……………暇だし雑談でもするか、エヴァで」

「素晴らしい考えだと思います」

というわけで、マスターと一緒にエヴァンジェリン様の話に花を咲かせます。

「あの時のエヴァはな、まるで親鳥の後を追う雛鳥のように可愛か

ったぞ」

「見てみたかったです。しかし、私が見たエヴァンジェリン様も可愛らしいですよ？ あの小さい体から、滲み出るマスターへの不変愛。貴史様と楽しげに会話するマスターを物陰で見ても目に涙が……」

「なん……だと……？ 裏方ではそんな事が……いや、視線を感じては居たがてつきり龍宮か薫かと」

「確かにそのお二方も居ました」

どんどん雑談が盛り上がっていく……。時刻は気付けば6時になり食堂へ向かい、学校へ登校し授業を受ける。

休憩時間でマスターと雑談をしていると、一夏さんが専用機云々と話が聞こえたりしましたが、どうでもいいですね。

「あの下賤な男子は良いとして、貴女達は大丈夫ですか？」

「ヴェネーラと絡繰については問題ない。むしろ、打鉄で事は足りるだろ？」

金髪さんの言葉に、織斑先生がさかさず答える。

きっとマスターを喋らせると、無駄に騒がしくなるからでしょうね。無理ですが……。

「ん？ ご希望なら生身でもいいぞ、織斑 千冬」

ほら、これです。まったく、IS相手に生身でだなんて、金髪さんが死んでしまいます。

私達がESで戦うと言う事は、つまりはそう言うこと……相手
殺してしまうから、そうならないようにESという拘束具を着けて
るだけ、ちなみにこの事は山田先生と織斑先生しか知りません。

「な、ななな……」

……ズバンッ！

「ブッ！」

「生身では許さん。あと織斑先生だ」

マスターの言葉に驚き、織斑先生は昨日みたい
にマスターの障壁をテキストに無視して、出席簿で教育的指導。
まるで明日菜さんみたいですね。

「そ〜だよ、カスミン〜。生身だなんて危ないよ〜」

織斑先生に続くように、少しのびのびとした声
が横から掛けられる。

「誰がカスミンだ！ って、誰だ、貴様は？」

「カスミンはカスミンだよ〜。あとわたしは〜」

「のほとけ布ほんね 本音ほんねさんです。カスミン」

「茶々丸！？」

カスミン……良いですね。おや？ どうしました、カスミン。

まるで「お前もか!？」みたいな顔をして……。

「やっほ〜、ちやまる〜」

ちやまる……………これは微妙ですね。確かに私の名前は、あだ名をつけるには難しいですが……………。

「っ！ 無視をしないでいただけますか!？」

「黙れ、ドリル」

「少し静かにしてください。貴女の黄金のドリルが、私達に絡めと輝き唸るのはわかりますが……………」

「ブフツ」

…バシンツ！

「痛っ」

私とマスターの言葉に金髪さんは顔を真っ赤にして、一夏さんはGガンネタがわかったのか少し吹いたあと、織斑先生の教育的指導を受けてます。カオスですねえ〜。

「雑談はそこまで！ 授業を始める!!」

織斑先生の言葉に、集まっていた生徒は自分の席へ即座に戻って行った。

その時、金髪さんが「覚えてらっしゃい」と口走ってましたが、おそらく授業が終わった頃にはマスターも私も忘れてるでしょうね。

「ご愁傷様です。 金髪ドリルン。」

今日の授業が終わり、マスターと帰ろうとしたところ……。

「ヴェネーラ、絡繰さん!!」

「ん?」

一夏さんが声を掛けてきました。 何かあるんでしょうか?

「俺達、クラス代表を決める為に戦うだろ? で、俺はまだISの事がわからないから、ちょっと教えて欲しいんだが……いいか?」

「何故、私達に頼む?」

「いや、箒……幼なじみな? 箒に頼んだんだが無視されちゃって

……」

ふむ、箒さん……なんとも掃除が得意そつな名前ですね。

まあ冗談はさておき、一瞬マスターと目を合わせて箒さんを見る
と……

「……………」

凄く睨んでいます。 私達と一夏さんを、心なしか赤いオーラのよ
うなモノが見えますね。

「……………茶々丸、教えてやれ」

「よろしいので？」

「アレに教われれば、無駄な時間を過ごして終わる」

- - バンツ！

マスターの声が聞こえたのか、篝さんが机を叩いて立ち上がりこちらに向かって来る。

どうでも良いですが、この世界では机を叩いて立つのが流行ってるんでしょうか？

「どういう意味だ、ヴェネーラ……………」

「なら聞くが一年生の中で、ISに詳しい茶々丸より知識があると？」

「私は……………私は篠ノ之 束の妹だ」

「だから？」

「な、なに？」

これは……………まさか、一夏さんを魔改造する気では？ でないと、マスターがここまで食い下がる意味がありませんし……………。

「IS開発者の妹？ だから他の誰よりも詳しいと？ だったらお前、なんでIS学園（こくえん）に居るんだ？」

「？　なあ、絡繰さん」

「はい？」

「ヴェネーラは何を言っただ？」

ふむ、まあ篝さんの言葉を普通に聞いたあとに、マスターの言葉を聞かぬならそういう反応をしますね。

「では、説明を……篠ノ之さんが言いたいのは、「自分はISを開発した人の家族だから、誰よりもISについて詳しい」です。ですが、これが本当なら日本政府が黙っていません。詳しいならISコアを開発する事が出来ますから」

「？　知ってるのと開発出来るのは……」

「一夏さんが言いたい事もわかります。ですが、開発者を除き誰よりも知ってると言う事は、研究員達と一緒に研究させればいずれは開発出来ると言うこと……つまり、本当にISについて知ってるなら今頃は研究所で、ISを研究中という事になります」

「ああ、なるほど……」

私の説明に聞き耳を立ててた皆さんは、納得したようにうんうんと頷く。

そして、篠ノ之さんは顔を歪ませて足早に教室から出て行った。

「あ、篝……」

「織斑 一夏……」

「なんだ？」

「今日は篠ノ之と話し合え、明日の朝にでも茶々丸の指導を受けるかどうか答える。茶々丸は優しいからな……二人くらいまでなら面倒を見るんじゃないか？」

「その代わりに、厳しくいきます」

「サンキュー！ ヴェネーラ、絡繰さん……」

素晴らしい笑顔で感謝の言葉を言って、一夏さんは篠ノ之さんを追い掛けた。

「にしてもあいつ……私だけさん付けじゃないとはどういっつう見だ
？」

「まあマスターですし」

「どう言う意味だ……」

さてはて、どうなるんでしょうね。これから……。

「おい、無視するな！ って、待てこら……」

何はともあれ、対戦が楽しみです。

茶々丸 視点

動き出した漆黒教（前書き）

茶々丸「マスター、ここの制服は改造しても良いそうです」

カスミ「なら、黒くしてくれ……白は落ち着かん」

茶々丸「反転魔法使ったら純白じゃないですか」

カスミ「ソレはソレ、コレはコレ」

オチなし

動き出した漆黒教

茶々丸 視点

なんだかんだあつて一週間。この間の一夏さんの特訓は基本的な事と、軽い精神統一等をやってきました。

これで一夏さんは、相手が私達じゃない限り勝てます。

必然的に金髪さんだけです。しかし問題………という問題はありません。

「いや、大有りだから！！俺のISがまだ来てないんだけど！！」

「安心しろ、ギリギリになって来るはずだ」

「安心出来ねー！！」

「落ち着け、一夏！！」

「だってよ……」

そう、一夏さんのISが来ていない。まあ原作通りなんですがね。

『もう待つてられんな……。先に絡繰とオルコットの試合を始める！！絡繰とオルコットはピット・ゲートに着け！！』

「フツ茶々丸がドリルとか……わかっていると思うが茶々丸」

織斑先生の放送にマスターは、私に目で語りかけて来る。

――油断するな、慢心など^も以^もつての外^{ほか}、お前は私の……最強の魔法使いの従者だと。

「イエス、マスター。あの金髪ドリルに、引き金を引く^{トリガー}時間さえ与えません」

「行け!!!」

マスターの命令に従い、栄光の星^{グロリー・スター}を起動させて、ゲートが開くのを待つ。

しばらくして、ゲートは開放された。

「あら、逃げずに来ましたのね（わたくしのブルー・ティアーズと同色のIS……どちらが上か見せ付けてやりましょう）」

金髪ドリルさんが鼻を鳴らし、腰に手を当てたポーズを取りながら話し掛けて来る。

まあ返事は返さなくても良いでしょう。私は私で、やることをやっておきましょう。

しかし、あのブルー・ティアーズというIS……遠距離からの攻撃手段しかないISでしたよね？ インターセプターなる近接武器もあるみたいですが原作を見る限り展開時間も遅く、近接戦闘に慣れてないので近接戦闘は無いと見て良いですし……。

「最後のチャンスを」

「要りません」

「っ！ 後悔してもおそく」

「早く始めましょう。それとも、事前にロックしてないと戦えないので？」

もつとも、私は私のセンサーできつちりかつちりとロックしてますが……。

あちらは私がロックしてる事に、気付いては無いでしょうね。

「良いでしょう。なら始めましょうか！？」

・・・警告！ 敵ISのセーフティのロック解除を確認。

「お疲れ様でした」

・・・ズドオオオオオオオオオオオンッ！！

「へ？ きゃああああああああああっ！？」

ガナリー・カーバーから、現状で出しうる最大出力のハイ・ストライターレットを放って、ブルー・ティアーズのシールドエネルギーを0にした。

うっん、反則的な機体を持つてると自覚はありますが、あえて言います。

「噛ませ犬にも劣る」

せめて避けましょうよ。 金髪さん。

茶々丸 視点

カスミ 視点

一瞬にして茶々丸の試合が終わった。 しかし、まだ来ない織斑一夏のIS。

いや、きっとISバトルにおける平均的な終了時間に、到着するよう計算してたんだろう。

うん、そう考えると茶々丸が悪いのか？ まあいいか……。

- - 報告、地中から急接近する機影あり。

ようやく、来たか……。

シュロウガの報告を受けて、私はピット・ゲートへ向かう。

その途中、山田真耶と織斑千冬と擦れ違ったが、問題ないだろう。そして、私がピット・ゲートへ着くとそこには茶々丸が待機していた。

「良い試合……と言って良いかはわからんが、早めに終わらせたのは予想外だ」

「マスターに、ご褒美が貰えると思って張り切りました」

まったく、こいつは……まあそこが可愛いところだ。

私は右手で、茶々丸の頬を撫でるように触れる。茶々丸は頬を赤く染め、嬉しそうな表情をして、目を閉じる……。って、ちよつと待て！！これはアレか？キスか！？キスをねだってるのか！？

「ええい、まどろっこしい！んっ」

「んんっ！?!?!?!?!?!」

数分後、茶々丸はようやく私を解放してくれた。え？どこまで行っただか？何故報告しなければならぬ？勝手に想像して悶えてる。

「キス以上、行為未満です」

「って、おい！！何故言っただ！？茶々丸うううううううう！！」

「マスターの恥体は需要があるので」

「あつてたまるかあああああああ！！」

まったく、茶々丸は何を言ってるんだ？私が襲われてるところなど、誰が得をすうんた。

『おい』

「なんだ？ 織斑 千冬」

『織斑先生だと何度言えば気が済む？ まあいい、さっさとゲートを通れ……試合が始まらん』

試合も何も織斑 一夏のISは、まだ一次移行してないではないか……。
……とりあえず、試合中にさせるか。

カスミ 視点

三人称

向かい合う一夏とカスミ。 いや、一次移行前の白式とカスミが向かい合っていた。

「……………」

「なんか言いたそうだな」

「ISは？」

一夏の問いに「予想した通りの問いだな」と言わんばかりの顔を
して、ゆっくりと話し出した。

それは時間を稼いでるような感じで……………

「貴様はまだ一次移行をしてないだろ？ だから一次移行するまでの間、チュートリアルを行う」

「えっと……それはありがたいけど……（時間は大丈夫か？）」

「では、始める」

一夏の心配を余所に、カスミによる一夏のためのチュートリアルが始まった。

「まずは移動についてだ。 十字キーを」

…がたたつ

「いや、これゲームじゃないから……！」

「冗談だ」

カスミの可愛い冗談に、一夏とギャラリーは揃ってずっこけた。

まあこれも一次移行するための時間稼ぎなのだろう。

チュートリアルが、始まってから二十七分。カスミの小意気なジョークを交えつつも、チュートリアルは最後の段階になった。

「では、最後の訓練だ。なお今までのチュートリアルは、戦闘を行おうでなんとか行動出来るレベルだ。もっと詳しく知りたいなら、授業に習うので安心しろ……と、そろそろだな」

「何が…!？」

腕時計を見たカスミがぼつりと呟く、それを聞いた一夏はカスミに聞こうとしたら、急に目の前にウィンドウが開いた。

「チュートリアル10! 一次移行!! ウィンドウの真ん中にある確認を押し、それでこの試合は始まる」

「了解!」

一夏は、確認と表示されたウィンドウを押し、白式は光に包まれた。

「漆黒の風よ、一陣の風となって敵を狩れ! シュロウガ!!」

一夏の一次移行に合わせて、カスミは自身のISを起動させる。光が弾かれ、中から一次移行を終えた一夏は、カスミの方を見ると自身の目を疑った。

一夏はカスミのISを起動する時の口上を聞いた。アレでISが起動するなら、カスミはISを纏っていないとはいけない。しかし、カスミはさっきと同じ格好で佇んでいた。

「……………あの、カスミ?」

「なんだ?」

「お前のISは？」

「貴様の目の前だ。 視線を上げてみる」

一夏は、言われるままに視線を上げた。 そして自分と向き合う形で、そこに黒い機体が居た。

「……………え？ ISが一人でに動いてる？」

アリーナ内の誰かが呟いた。 そう、カスミのシュロウガは、搭乗者であるカスミを乗せずに上空で浮いているのだ。

これに関して、山田先生と織斑先生も驚きを隠せないでいた。

「私のISはな、稼働時間が蓄積されればされるほど成長するのさ。そしていつしかシュロウガは、搭乗者を乗せずに搭乗者のイメージで行動することを可能とした。（さらに困った事に自我が生まれ、リミッターが付いてるにも関わらず、その上から出力が上がると言った、困った奴になったがな。 まあ初戦で負けたから、前よりも強くあるうとしてるんだらうな）」

「え〜〜〜……………」

一夏はその出鱈目さに呆れ、ギャラリー達は有り得ないと頭を抱えていた。

「ああ、私を攻撃するのは無駄だぞ？ なんせ私を守るように、シールドエネルギーとは別のシールドが私を纏ってるしな（まあ私が張った障壁だがな）」

「いや、しねえよ」

「？」

上下左右斜めから、擦れ違い様に切り刻んで行くシュロウガ。

徐々にシールドエネルギーを減らされていく白式の周りに、紫色の魔法陣が描かれていった。

そして、白式のシールドエネルギーが0に差し掛かる時、シュロウガは攻撃を止めて距離を置いた。

それを見て、好機と見たか一夏は白式を動かすも、急に魔法陣が爆発して白式のシールドエネルギーを0にした。

この間もカスミは高笑いしてたとか……。よく喉が枯れなかったな。

カスミと一夏の試合が終わって、カスミと茶々丸は保健室に居た。

「ん、ん……こ、こは？」

「保健室です」

「茶々丸……と、カスミ」

しばらく経って、一夏は目を覚まして横に居た茶々丸とカスミに気付き、試合がどうなったか理解した。

「負け、たんだな……俺」

「ああ、ボロ負けだったぞ」

「手も足も出てませんでした」

・ ・ ・グサ、グサ！

「二人の言葉がきついぜ」

二人の辛辣な言葉に、精神的ダメージを受ける一夏。

そして、胸の内から沸き上がる申し訳なさや悔しさを一夏は感じ
た。

時間を割いてまで、自分にISの事を教えてもらった茶々丸に、
試合時間を使って実技で教えてくれたカスミに、IS初心者である
自分にもわかりやすく、教えてくれた二人に対して、結果手も足も
出ない酷い試合をしてしまった。

それが悔しくって、申し訳なくって……………

「ごめん……………」

一夏はただ一言の謝罪ですべてを籠めた。それに気付かないほ
ど、茶々丸は機械ではないし、カスミもまた理解した。

「大丈夫です。徐々に強くなっていけば良いんです」

「今日は相手が悪かったただけだ。あのドリルとなら勝てたかもな
……………だが、今回の戦いで悔しかったなら、這い上がって来い、一夏
！ 必要なら茶々丸をISの特訓に貸してもいい」

「ああ、ありがとう」

茶々丸とカスミの言葉に励まされ、一夏は涙を拭い新たな決意を
目に宿して、二人に感謝した。

余談だが、このあと一夏の中に何か芽生え、IS学園の制服の
色を白からカスミ達と同じ黒に変わった。

三人称

動き出した漆黒教（後書き）

一夏「茶々丸さん！ 俺の制服を黒くしてくれ！！」

茶々丸「構いませんが……何故ですか？」

一夏「え？ いや、茶々丸さんやカスミ様の制服がカッコイイから」

茶々丸「そうですか……わかりました」

一夏「ありがとう！」

オチな……ん？ 一夏がカスミを様付けにしてる理由？

漆黒教の信仰対象はカスミですが何か？

オチなし

これが私達の代表！（前書き）

??「ふうん、クラス代表に話がある」

茶々丸「貴女は同じクラスの……海馬 瀬奈さん」

カスミ「……………ん？ どうかで聞いた名だな」

茶々丸「IS会社の中小企業に、海馬コーポレーションという企業があり、その社長さんです」

海馬「今でこそ、中小企業という枠に収まっではいるが、いずれは世界に名を轟かす大企業へと進展させる！！」

カスミ「ほう……………で、何の用だ？」

海馬「貴様が代表決定戦で見せた、自立したISのデータが欲しい！」

カスミ「メリットは？」

海馬「この十ケースのトランクいっぱいに敷き詰めた金を用意してある」

カスミ「……………いいだろう」

海馬「交渉成立だ（これで私の悲願が達成される……………フッフッフッ）

」

あとがき
に
続
く

これが私達の代表！

茶々丸 視点

クラス代表戦から翌日、朝のSHR。

「では、一年一組代表はカスミ・ヴェネーラさんに決定です。めんどくさがらずにちゃんとやって下さいね？」

と、山田先生は外を眺めてるマスターに声を掛けます。

しかし、マスターは山田先生の言葉を無視して、机にうなだれ寝ようとし……

…ゴスンッ！

織斑先生の（出席簿で叩くという名の）指導で、マスターにダメージが……。

端から見て、パリーンツと割れる障壁は何と言つか良い響きです。

「教師の問いには、必ず返事をしろ」

「貴様は、毎度毎度（障壁を無視して）頭を叩くな！！」

…ガスンッ！！

「お前も何度言えばわかるんだ？」

…パチ、パチチツ、バチバチバチバチ…

織斑先生とマスターの間に、火花が飛び散るのが見えます。徐々にマスターが押してますね。流石は私のマスター。

「フツ……嘗めるな」

・ ・ ・ バチバチバチバチツ！！

「な、くっ」

今度は織斑先生が押してる！？ 馬鹿な、まだあんな余裕が……

「あ、あの一」

山田先生が控えめに織斑先生に声を掛けるも、マスターとの視線の攻防に夢中なのかまったく聞いてません。

クラスの皆さんも決着が気になるのか、マスターと織斑先生の戦いを瞬きまたたせずに見てます。

はたして、この勝負の行方はっ！？

・ ・ ・ キーンコーンカーンコーン

「む、時間が……というわけで、ヴェネーラはクラスの恥にならないように！」

「チツ」

「返事をしろ」

「あーあー、わかったよ」

「まあいいか……」

マスターの返事を聞いて、織斑先生と山田先生は退出した。そして、私達の所へ来る一夏さん。黒い制服もなかなか様になっ
ってますね。

「一夏、今からでも遅くない……私の代わりにクラス代表に」

マスター、先程了承したばかりでしょうに……

「いやいや、俺如きが茶々丸さんの上に立つなんて有り得ない。ましてやカスミさんの上なんて恐れ多い」

「使えん信者だ」

「一夏！」

「ん？ どうした、箒」

マスターと一夏さんが楽しく話していると、篠ノ之さんがこちらへやっ
て来ました。

「なんだか、怒ってるように見受けられますが……」。

「その黒い制服はなんだ!!」

「カツコイイだろ？ 茶々丸さんとカスミさんとお揃いだ！」

「はぁ……」

私達を巻き込むとは、流石は超鈍感男。 あんな事を言えば、恋する乙女の篠ノ之さんは私達を…

- - キツ!!

ほら、睨んできた。

「あ、あの……」

「はい？」

いつの間にかやって来た金髪さん。 なんの御用でしょう？

「こ、この間はすみませんでした」

「「「………?」「」」

金髪さんの言ってる事に理解出来ず、私とマスター、一夏さんは同時に首を傾げる。

ただ一人、篠ノ之さんは何か思い至ったのか「あゝ」みたいな顔をしています。

「この間……何かあったか？」

「へ？」

「この間という曖昧な表現では、膨大な記録の中から検索出来ません」

……私の名誉の為に言っておきますが、私とマスターは一日

が終わる度にダイオラマ内で一週間は過ごしています。

そして私はマスターと身内以外、全力でどうでもいいのです。

マスターも身内以外、どうでもいいらしく余計な事は忘れるので

……

「俺もまったくわからん」

「あの……」

「茶々丸はともかく、本当に使えんな。 貴様」

「差別だー!!」

……ブチッ

一夏さんが叫ぶと同時に、何かがキレる音が聞こえた気が……

「わたくしのお話を聞いて下さい!!」

「いい加減にしろ!! さっきから黙って聞いてれば……私が説明してやる!!」

というわけで、金髪さんの台詞を奪って篠ノ之さんが話してくれました。

日本を侮辱……ですか。

「果てしなくどうでもいいな」

「あー、俺もどうでもよくなった」

私もどうでもいいと思つてますが、マスターを奴隷などと許すまじ！… とりあえず、消滅させれば問題…

「大有りですわよ！！」

「黙りなさい。日本を侮辱したイギリスを侮辱されたなどはどうでもいいんです。なんせ私達がそこに住んでる、または生まれた場所であつて、私達の所有地じゃないのですから」

そう、国なんてどうでもいい。重要なのはマスターを従属させるという暴挙に出た金髪ドリル！！ さあ、断罪の時です。

潔く……………死ネ。

「ひいつ！？」

「落ち着け、茶々丸」

「申し訳ありません、ドリルさん」

「もういいですわ」

それはそれは、懐が広いドリルさんですね。こつちも挑発のような事を言つたはずですが、許してもらえるなんて流石は貴族！！関係ありませんね、はい。

- - キーンコーンカーンコーン

「ん、休み時間が終わったな……。散れ」

マスターの言葉に一夏さん、篠ノ之さん、ドリルさんが自分の席に戻っていく。

そしてマスターは、廊下に出て……………

「一年一組は、即座に戻れ!!」

と、声を大にして叫ぶ。なんだかんだ言って、やることはやるんですよね。マスターは……………。

そして、織斑先生がやって来ると……………

「ほう…全員ちゃんと席に着いてるとはな……………」

と、感心していました。

そして、放課後。

「一夏さん、今日もISの動かし方について指導します。マスターが……………」

「茶々丸でいいだろ……………」

「よろしくお願いします……………」

「チツ…しょうが……………」

……………バンツ!

マスターが渋々了承しようとした時、ドリルさんと篠ノ之さんが机を叩いて立ち上がり、ズカズカとこちらへやって来ました。なんだか面倒な事になりそうですね。

「一夏さんのISの指導は、このわたくしが…」

「私は第一アリーナに居るから、私の指導を受けたいならそっちに来い。行くぞ、茶々丸」

「イエス、マスター」

マスターは一夏さんの意志に任せて教室を出て、私もマスターの後を追いました。

結果から言うと、一夏さんはやって来ました。

篠ノ之さんとドリルさんを連れて……。

篠ノ之さんは、前と同じように私達からISの事を知りたかったらしいです。

ドリルさんは一夏さんから、私達の指導を一度体験したら？ という言葉に乗せられ、指導終了後は落ち込んでました。

何と云うか、自分が受けた訓練よりわかりやすく、程よい厳しさだったとか……。

程よい厳しさ？ きっと向上しやすいという意味なんじゃないかね。

一夏さん達の指導が終わったあとは、今度は私達がダイオラマの魔法球でISの訓練です。

描写はありませんが……。

茶々丸視点

三人称

とある樹海にある研究所に、一人の女性が居た。

「へえ〜いつくんがクラス代表じゃないんだ〜……」

カタカタとキーボードを叩き、IS学園のデータバンクにアクセスしていく。

「ふうん、古代文明人ねえ〜。私の子と昔のISがどちらが強い
か興味あるな〜」

そう言っつて、女性は小脇に置いたISを眺めて、悪戯を思いついたように厭らしい笑みを浮かべた。

三人称

これが私達の代表！（後書き）

海馬「出来た……フハハハハハハ、やったぞ！完成した！！私
の専用のIS！！その名も青眼の白龍！！」
ブルーアイズ・ホワイトドラゴン

ブルーアイズ「キシヤアアアアアアアッ！！」

海馬「フハハハハハハ…アツハツハツハツハツハツ…素晴らし
い、美しいぞ！！私のブルーアイ…」

社員「海馬様！！上空より熱源が…来ます！！」

…ズガアアアアアアアアアアアッ！！極太レーザーがブルーア
イズに直撃。

海馬「何！？」

…ズドオオオオオオオオオッ！！ブルーアイズ爆破。

海馬「私の……ブルーアイズ……が……」

東「私の子供をモンスターにしないでもらいたいな、次やったら会
社ごと消滅させよー」

オチなし

クラス代表決定戦の結果。

茶々丸VS 一夏

カスミVS セシリア

茶々丸VS カスミ

∴ 勝ち

∴ 負け

茶々丸とカスミの戦いは、一撃戦闘の同スペックでの試合です。
何故、描写してないか？ 前の戦いで茶々丸VSカスミの戦いはお
腹いっぱいだから

ではでは、次回もお楽しみに〜

会いたい(前書き)

茶々丸「謎です」

カスミ「何がだ？」

茶々丸「原作辺りはスムーズに書けたのに、オリジナルに入ると筆が遅くなるのがです」

カスミ「大方、奴の力量不足だろうよ」

茶々丸「それになんだか目茶苦茶です」

カスミ「先にそう言っただらば指摘は受けないからな」

茶々丸「抜け穴だけは探すの上手ですよね」

カスミ「そうだな……」

オチなし。

あとがきにアンケートがあります。

ご協力お願いします。

会いたい

茶々丸 視点

「ではこれよりISの基本的な飛行操作を実践してもらおう。専用機持ち四名は試しに飛んでみせろ」

織斑先生の言葉に従い、私たちは即座にISを起動させる。

流石に今回は、マスターもISを纏ってますが……

しかし、白、黒、青、青と並ぶ専用機は壮観です。

惜しむくらいは、青が被ってる所でしょうか？

「よし、飛べ」

言われた通り、私とマスターは急上昇した。なんだか上がっすらと暗いけど、問題にはならないと思います。

そのあとちょっと下辺りで、一夏さんと金髪さんが静止していた。まあ一夏さんは私とマスターの指導で、原作よりは上手く動かせますしね。

「一夏っ！ いつまでそんなところにいる！ 早く降りてこい！」

少し考え事をしてると、通信機から篠ノ之さんの怒声が聞こえてきた。

何故、私の方へ？ と思いましたが、どうでも良いかと考え放置。しかし、このままだと煩そうなので……

「いつまで、と言われましても織斑先生の指示がまだなので、勝手に降りると怒られます。あと私は一夏さんではありません」

「か、絡繰!？」

「はい、絡繰です」

私が丁寧に教えると、慌てたようにいろいろと機械を操作していき篠ノ之さん。

すぐに一夏さんに繋げようとした気持ちばかりですが、謝罪くらいあっても良いと思うんですが……あ、織斑先生に叩かれた。

と、遙か上空から見えるのか？ と言われそうですね。

まあ見えますが……。

何故？ と聞かれても、それはISと私の性能のお陰です。それ以外に理由はありません。

「では急下降と完全停止をやって見せる。目標は地表から十センチだ。まずは織斑、オルコット」

織斑先生からの指示で、ドンドン豆粒になる金髪さんと一夏さん。

そういえば金髪さんと一夏さんは、この間出来なかった決闘に白黒着けるため、戦ったそうです。

まあ一夏さんは、どうでも良いと思ってたらしいのですが、金髪さんがどうしても決着を着けたかったらしいです。

結果は武器の性能を把握し、イグニッション・ブースト瞬時加速を上手く使った一夏さんの勝利で終わりました。

その時に金髪さんのハートを狙撃したらしく、金髪さんは晴れて篠ノ之さんの仲間入り。

一夏さんとISの特訓をしてると、割り込んで来たりして……

……はあ、まあマスターの「雑魚は黙ってる」発言で毎度大人しくなるんですがね。

「次、絡繰とヴェネーラ！」

と、呼び出しが掛かりましたね。

それでは行くとしましょう。

と、私は問題無くクリアー。

そして、マスターはと言うと……

……ヒュー……ンツ、ピタツ、ズドオオンツ……！！

急下降したあと地表十センチで止まったものの、何かのトラブルで墜落。

絶対防御とか障壁とかで守られてるとはいえ、大丈夫でしょうか？
あと、一瞬吹き出した金髪さんと篠ノ之さんには後で個人的な
O H A N A S H Iが必要のよう……。。

「グラウンドに穴を開けるな」

「うるさい……」

「情けない奴だ」

「まったくですわ」

「開始一秒でやられるちよろい人に言われるなんて、マスターも夢にも思わなかったでしょうね。あとその清掃道具、いい加減にしとけよ」

「なっ!?!」

「にっ!?!」

私の言葉を聞いて睨む二人を無視して、私はマスターの方へ行ってマスターを抱き起こす。

「む、すまん」

「いえ……」

「大丈夫か？ カスミさん」

「まあ」

私が抱き起こすと、一夏さんがやって来てマスターに声を掛けます。

「というか、彼だけクラスの中でマスターを笑わなかった人。良い人ですね。」

そのあとも授業は続き、放課後。

「絡繰、ヴェネーラ……」

今日は一夏さんの訓練は無いので帰ろうとした時、篠ノ之さんが声を掛けてきました。

なんとというか、怒りのオーラを放って……

「なんででしょう?」

「貴様達に剣で勝負したい（ISでは勝てんが、剣道なら……）」

篠ノ之さんが剣で勝負と言った瞬間、マスターの動きが一瞬だけ止まり、そして……

「寝言は寝て言え、お前では私に勝てんよ……」

篠ノ之さんに向かって、そう言った。ソレに対して篠ノ之さんは怒ったのか、所詮はIS頼りのお嬢様だな?と単純な挑発を言ってきた。

そして、これが彼女にとって悪夢の始まりでした。

茶々丸 視点

三人称

篠ノ之 篝の挑発にカスミは乗り、二人は剣道道場へと足を運んだ。

途中セシリアと一夏と出会い、新たに加わった二人を引き連れな

がら……

そして、篠ノ之 箒は自身の防具を身につけ更衣室から出ると、そこには制服姿のまま竹刀を持つてるカスミが目映った。

「防具はつけなくていいのか？」

「一つ、言うておくれ。こと剣道において、私に勝てるのはこの世で二人だけだ」

「何が言いたい」

「貴様の剣に当たるほど、私は雑魚くないと言いたいのさ」

カスミの言葉に箒の何かがキレた。
それもそうだろう。

箒は剣道の全国大会で優勝した程の猛者だ。
その箒をあるうことか、雑魚発言。それが怒らないはずはない。
何よりも、今日の授業で無様な姿を晒した相手に馬鹿にされては

……

「後悔してもしらんぞ」

「私に剣道で勝負を挑んで来たんだ。一本くらいは取れよ？」

カスミの軽口に箒の怒気が高まり、殺気を出すにまで至る。

見学に来た一夏とセシリアは、箒が出す雰囲気当てられ、若干落ち着かずにオロオロとしていた。

「では、これより試合を始めます。 始め」

・ダッ！

茶々丸の開始の合図と共に、箒は一息でカスミに向かって竹刀を振り下ろすが……

「胴！」

・ズバアアアンツ！！

「ガフツ！？」

カスミは、それよりも速く箒に胴を打ち込む。

その速さと力は今まで感じてたものより劣るものの、その動きは今までよりも洗練されていた。

「一本……だな。立て雑魚、せっかく力をセーブしてやってるんだ。楽しませろ」

カスミの理不尽な態度と圧倒的な威圧には、それなりの訳がある。それは、神から貰ったチートな能力を得た事による副産物（驕り、慢心）だ。

しかしカスミはある事柄においては、その能力を封じ本来のカスミ自身の力でやると決めてる事がある。それが剣道。

カスミが心を許せる友と最愛の人と共に、やっていた唯一無二の絆とも言えるべきスポーツだ。

そしてカスミはある事情故に、その絆を大切にしており、このスポーツだけは自分の力だけでやる事を決意していた。

故に力をセーブしてると言っても、それは本気じゃないという訳ではない。

だが、そんな事を知らない篤は当然、真面目にやってくれてないと勘違いをして、さらに怒りが増した。

しかしいくら怒りを増そうとも、長き年月にわたり剣を振るってたカスミに勝てる訳もなく、二本目の面によって篤は気絶した。

三人称

一夏 視点

す、すげえ……。何が凄いつて、カスミさんがだよ。

篤とカスミさんが剣道で勝負をするって話だから、見学しに着いてきて正解だったと思う。

今まで見せてきてくれたカスミさんの中で、特に速いわけでもなく、力強いわけでもない……。むしろ平均的だ。

だけどソレを補うほど、技量が凄かった。最初の篤の一打目が当たる瞬間、カスミさんは二、三步前に移動して、まるで川の流れるように竹刀を胴に打ち込んだ。

その時に出た音は、普通に打って出るような音じゃなかった。

篤が一瞬、息を吐き出していたからよくわかる。アレは、中にもうダメージを与える程の胴だ。

少し篤の事を心配したが、いくらカスミさんでも大怪我をさせる事はないだろうと思った。

二本目を見るまでは……………

二本目、アレを試合と言って良いのかわからない。

そもそも試合になってなかった。

箒の怒りに任せた打ち込みを軽いステップで避け続ける。

それを何回か繰り返し返していると、突然カスミさんは「飽きた」と咳いて、箒の頭部がから空きになると面を打ち込んだ。

最初の胴とは比べものにならないくらいに……

「介抱くらいはしてやれ、茶々丸」

箒が倒れるとカスミさんは冷めた態度で、茶々丸さんに命令した。それがなんだか、酷く怖く恐ろしいものに見えた。

だから、かな……俺はカスミさんの肩を掴んで問い詰めようとした。

そう……問い詰めようとしたんだ。

「私を慕うなら、今はやめておけ」

カスミさんの肩に届く前に視界は一転し、俺は何がなんだかわからない内に俯せの状態になっていた。

「茶々丸、そこで俯せになった馬鹿も追加だ」

「イエス、マスター」

カスミさんはまた茶々丸さんに命令すると、道場から外へと出て行った。

残ったのは、呆然としてるセシリアと俺と気絶した箒を介抱する茶々丸さん、倒れた俺に気絶した箒だった。

「茶々丸さん……」

「マスターは気難しい人ですから……たまにああいう風になるんで

す

俺の疑問に答えるように茶々丸さんは言う。

でも、だからってあんなに冷たくしなくても良いと思うのは、俺の勝手な言い分なのだろうか。

「そうですね。マスターには敵が多いですから、自分に優しくしてくれる人が好きなんです」

それは……なんて言うか、悲劇のヒロインみたいだ。

「否定はしません。だってマスターは誰よりも人間的なんですから」

そう、ですね。ところで……

「なんですか？」

心を読むのをやめてください。

「わかりました」

それ以降、茶々丸さんは俺の心の声に反応する事はなかった。

一夏 視点

カスミ 視点

篠ノ之を剣道でボコツたあと、私は道場を出て無差別に転移した。だから此処が何処かわからない。文字が英国語だからイギリス辺りだと思う。

しばらく歩いてると、海へ出た。

青い海、向かつては引く波。

空は青く太陽がさんさんと紫外線を降り注ぐ……。

ずっとそうやってると視界がぼやけ、目からぼろぼろと涙が出てきた。

転生してから涙が出たのはこれで何回目だろう？ 貴史達と別れて生きていた始めの頃は、結構泣いていた気がする。

エヴァと過ごしてた時も、茶々丸と過ごしてた時も、薫と居た時も泣いた記憶がある。

でも、いつか会えると信じてたから涙を拭い、いつもの私に戻れた。

でも……………

でも……………此処には貴史が居ない。

何処探しても貴史は居ない。

私が泣いてる時には、傍に居てくれると言った貴史は居ない。何処にも居ない。

貴史、会いたいよ。

「……………くっ……………」

貴史、見つけ、てよ。

「うああ……………う……………」

貴史、傍に……………居て、よ。

「うわああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああ
！！！」

私が泣いてるんだから、あの時の約束をまもって！！

カスミ 視点

会いたい（後書き）

アンケート！

貴史に依存しまくりのカスミさん
いい加減、我慢の限界。

貴史成分が欲しいらしいです。

茶々丸だけじゃ足りないのです。

ですので、カスミの心の支え的存在を出すかどうかを皆さんに聞きます。

1、茶々丸さん、超頑張れ！！……茶々丸が一人でカスミを深い部分で支える。 信者？ アレは表面を支えるだけです。

2、貴史、登場！！……ただ主人公は茶々丸です。

3、最近、作者が気に入ったある作品のキャラクターをねじり込む。……誰かは秘密で、読者の方達の返事がない場合もこれになります。

以上の三つの内、どれか選んで下さい。

会えた（前書き）

茶々丸「更新速度が遅くなってきたこの小説」

カスミ「やはりオリジナル話だと遅いな」

茶々丸「この小説を楽しみにしてる読者の方達に申し訳ありません」

カスミ「居るのか？ こんな駄文を楽しみにしてるそんな物好きな奴は」

茶々丸「作者の頭の中に……」

秋代「うおい！」

… シュロウガ起動します。

「え……」

… パアア…

俺の意識は光によって浮上し、漆黒の体を持って現れる。

泣いていた女の子……カスミは目に涙を溜めたまま呆然としていた。

それが可愛くて、可愛くて……つい、頭を撫でた。

「シュ、ロウ……ガ？」

「……………」

「まさか……………」

しばらく無言で撫でると、カスミは何か気付いたように目を限界まで開いた。

「こっちは久しぶり……か？ まあ向こうでは毎日のように会ってるが……………」

「たか、し？」

「よ！ カスミ」

限りなく明るく返事をする、カスミは俺に抱き着いてまた泣いた。

俺はカスミの頭を撫で続けた。

シユロウガ（貴史） 視点

茶々丸 視点

ツンデレ（篝）の介抱を終えて、鈍感（一夏さん）、ヒステリックスパイラル（セシリア）のいじ……もとい特訓を終えて部屋に戻ると……

「やー」

更織会長が居ました。

更織楯無……三学年の生徒で、このIS学園の生徒会会長。

その性格は自由人と言った方が、いいかもしれませんね。

貴史様ほどではありませんが……。

しかし、何故ここに？ 部屋にはトラップが仕掛けてあったはずですが……

「いやーこの部屋凄いわね。ドアノブに高圧電流が流してあったり、部屋に一步踏み込んだらどっか消えるし……とりあえず私の連れを何処に消したか教えて？」

なるほど、なるほど……お連れさんが消えたと……。

おそらく、ダイオラマの魔法球に転移されたんでしょうね。

侵入者対策でセットしたんです……

「この部屋に入られて何時間経過しましたか？」

「ん〜三時間かなあ」

という事は、三日はダイオラマでの生活。

確か今日の転移する場所は、雪山でしたね。

.....おや？ これはまさか.....

「.....」

「え、何？ なんで急に黙ったの？」

「.....」

「私を連れの方へ連れて行きなさい！！」

と言われましても、ただ部屋に設置した陣に入ればって、そういえば解除してましたね。

「果てしなくめんどくさい上に、勝手に侵入してきた貴女達に命令される筋合いはありませんが、流石に死なれると困るので案内します。お連れさんは三日間飲食せずとも生きてますよね？」

「いろいろ聞きたい事があるけど、まあいいわ.....聞き流しておくわ。多分、大丈夫だと思うし」

「では.....」

というわけで、ダイオラマの魔法球を置いてあるところへ行きます。魔法の秘匿？ なんのことやら機械の私にはさっぱり.....。

さて、ダイオラマ内に来たのは良いですが、正規転移と防犯転移では転移場所は異なり、防犯転移は上記に書いたように猛獣が徘徊する森とか雪山とか砂漠とかに、正規転移はマスターの建物の屋上に転移します。

何が言いたいのかというと、猛獣^{ひし}奔めく雪山の中に三日も同じ場所に居るはずもなく、生きているなら雪山の何処かにある洞窟の中に居るであろうが、生憎雪山は広いのです。

広大な雪山の中で、人間二人を見つけるなんて、砂漠より困難ですよね？

「あの雪山に居るのよね？」

「生きていれませんが……」

「生きてるわ！」

「では、探しましょう……栄光の星、起動」

私は自分のISを起動させると、更織会長も自分のISを起動させます。

さて、人命救助と生きましょう。

搜索から数分。

結果から言うと見つけました。

私たちが下へ降りると、二人はびくつと体を震わせてこちらを見ると、顔をぐしゃぐしゃにして一人は更織会長へ、もう一人は私の方へ飛び付いてきました。

「うわあああああー……ん、お嬢様あああああああああー!!」

「ちゃまるうううう~~~~!!」

更織会長に飛び付いたのは、生徒会会計の布のほとけ 虚うつほ、三年生です。苗字と学年から解るように、布 仏 本音さんのお姉さんですね。

そして私に飛び付いてるのが、布 仏 本音さんです。

少し髪がチリついてる事から、高圧電流の被害者さん? ギャグ補正で助かったんでしょうか?

そのあと虚さんと本音さんがお腹を鳴らしたので、急いで建物へと向かったのですが、マスターの不幸が私にも移ったのか、帰る途中で鳳凰に出会いました。

HAHAHAHAHAHAHA……」

「笑ってないでなんとかしてよ!!」

「お嬢様あああああ…もう嫌です！ 帰りたいです…ふええええええん」

「ちゃ、ちゃまる〜〜」

私が声に出して笑っていると、更織会長からなんとかしろと指図されました。

しかし虚さんと本音さんは、流石にまいつていますね。まあ三日も居れば当然でしょうね。

此処三日間、彼女達は猛獣に襲われたり、食べられそうになったりといういろいろあったようです。

「しかしですね、会長」

「何よ!?!」

「私はマスターの命令以外聞くきはありません!?!」

「良いじゃない！ 聞いてくれたって!?!」

「黙れ不法侵入者」

「あんだ、たまに性格変わるわね……」

「!?!」

そろそろ始末した方がいいですね。

「では、悪いですが死んでください」

私達が建物の屋上に降り立つと、そこに金髪の女性が私達を出迎えていた。

「……………なんで此処に本音とその他二名が居る？」

「侵入してこちらに転移してきたらしく」

「はぁ……………」

私の言葉に心底呆れたと言った感じで、ため息をつくマスター。しかし、何処かいつものマスターと違うような……………いつもなら元に居た場所に置いてきなさいと言うのに……………。

「茶々丸が、私に対してどう思ってたのか、よくつくわかった。

後ろを向け、茶々丸……………ぶつといのを刺して濃厚なのを入れてやる」

そう言っ取り出したのはって、ちょ、マスター！？ そ、そんな遅いものを使われたら私は、私は！！

「魔力注入DX（ジェル印の徳用）！！ さぁ……………よがり狂え！！」

「 @ x m g ……！！」

「うわぁ……………ちやまる、顔が真っ赤……………」

「なんだか……………エロい、わね」

「わわわ……………」

「フフフフフ……いいんか？　これがいいんか？」

「マス、マ、マスタ、これ、いじよ……」

…ブツン！

茶々丸 視点

カスミ 視点

む、やり過ぎだか……。

私の足元で、ビクンビクンと動いてる茶々丸を見て、そう思った。しかし、後悔はまったくしてない。

「さて、茶々丸はこのままでいいとして」

「「「！」「」」

私は侵入者に目を向けると、侵入者はビクツと体を揺らしてこちらを見る。

一人、更織とか言う生徒会会長は私を見定めようとしてるが……。

「本来なら猛獣や幻獣の餌にするんだが、流石にそれはまずいか…
…と言つてもやる時はやるんだがな。　まあいい、今日は気分が良
いからな……特別に許してやる」

「「ほっ」「」

私の言葉に、胸を撫で下ろすボロボロの二人。
多分、こいつらが此処に何日か居たんだろうな。

本音に至っては服が焦げて、髪がチリチリになって、顔が煤すすだらけ……………高圧電流を受けたのか？

「とりあえず、説明は後でしてやる。本音はこっちに来い。流石に年頃の女子がそんな酷い格好は見るに耐えれん、そのボロいのもだ」

「ボロッ！」

「行こう、お姉ちゃん」

姉妹だったのか、まあどうでもいいか…………。

「私はどうしたら良いんだろう…………」

知るか。

怪我也汚れもない奴にまで優しくするほど、私は優しくないんだよ。

にしても、説明めんどくさ…………。

茶々丸に任せるか、あと本来ならこの空間限定の不老薬を飲ませるんだが…………そこまでする義理はないだろう。

一週間そこらで急に成長しないだろうし、ああ本音達には必要かな？ やれやれ、忙しいな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8378u/>

～三人の転生者・メイドと漆黒～

2011年9月28日19時13分発行